

小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿(四)——梅枝巻、竹河巻

小城鍋島文庫研究会

中尾友香梨・白石 良夫・三ツ松 誠・土屋 育子・亀井 森
日高 愛子・大久保順子・村上 義明・二宮 愛理・河野 未弥

前号に引き続き、佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』(函架
番号〇九一―九)第六・七冊を翻刻紹介する。凡例については、前号を参
照されたい。

なお、本稿は平成二十八年科学費・基盤研究(C)「地域の文化財
群としての小城鍋島藩蔵書の研究―その全貌の解明と具体例の分析―」
(研究代表者＝中尾友香梨、課題番号15K02251)による研究成果の一部で
ある。

翻字分担

梅枝(河野未弥) 藤裏葉(中尾友香梨) 若菜上(三ツ松誠) 若菜下(土屋
育子) 柏木(土屋育子) 横笛(村上義明) 鈴虫(亀井森) 夕霧(土屋育子・
日高愛子) 御法(二宮愛理) 幻(大久保順子) 匂宮(日高愛子) 紅梅(中
尾友香梨) 竹河(白石良夫)

※原稿の作成に際して、各巻の翻字担当者に加え、沼尻利通が点検を行っ
た。

【第六冊】

むめかえ

ふちのうらは
わかな上
同下「(一才)
(白紙)」「(一ウ)

梅之枝 [源卅九才春 以詞也]

明石の姫君十二才御もぎの事おほしそく朱雀院¹
の御子冷泉院の御有子十三才にて二月に御かう
ふりの事有へければ入内も打つゝくへきにや^(明石の姫君)
二条院の御蔵あけさせ綾錦なとり出給ふ古
院の御時こま人の奉りけるあやひ²ごんきなどさま^(赤地)

- 1 男ハ元服女ハ裳着
- 2 桐壺の巻二に源ヲ相せし時高麗人色々物を参らせし也
- 3 緋金錦 赤地也

く御覧しあてつゝ此たびの御しつらひせさせ
給ふ香ともは昔今のとりならへ御かたくにくばりて
たき物二くさつゝあはさせ給ふ内にも外にもか
なうすのをとみ、かしこままし頃もおと、はしん殿
にはなれおはして黒方侍従合せ給ふ紫の上は「(2才)

東の中のはなちいでにて八条の式部卿の御ほうをあ
はせ給へりかうこのはこつば火とりの心ばへすぐれ
たらんともをかぎあはせいれんとおほす蜚兵部卿
宮此御とふらひにわたり給ひ二月十日雨少し
ふりておまへのこうはいをながめおはするに前斎
院よりちりすきたる梅のえたにつけたる文参る
こんるりには五葉のえたしろきには梅をえりて
引むすびなよひかになまめかしうし給へり
〔斎院〕花の香はちりにしえたにとまらねと
うつらん袖にあさくしまめや「(2ウ)

(挿絵) 「(3才)

4 料理

5 侍従 黒方ハ不男伝ト云 承和ノ御門ノ御いましめなれは紫ノ上ヲ正記すへき也

6 放出(ハナチイテ)寝殿ノ母屋ノ内ヲ半分ワケテ中ヲ隔テ外様ノ人ヲ呼入ル所也
中トハ母屋ト東西ノ廂トノ間ニ障子ヲ立テ御帳ヲ立タル所ヲ云也 源モ此寝殿ノ内ニ
はなれておはします也

7 散透

8 麗

9 今は斎院にましまさぬを散にし枝と卑下ノ心也
10 うつらん袖はそなたの也

〔源〕「(へ)花の枝にいと、こゝろをしむるかな
人のとかめん香をはつゝめと

兵部卿宮たき物の判者也源の二くさは右近の陣
のみかは水のほとりになずらへて西のわた殿
の下より出るみぎはちかううづませたまへるを
惟光の子兵衛のぞうほりて参る夕霧の宰相
とりてつたへ参らせらる宮いとくるしきはんざ
にも侍かないとけふたしやとなやみ給へり斎院の御
くろぼう源の侍従たいのうへのは三くさある中に
梅花をまさる匂ひあらしとめで給ふ夏の御かたは
かえう一くさ冬の御かたのえかう百ぶのほういつれも「(3ウ)

むとくならすため給ふを心きたなきはんさな
めりときらひ給へり蔵人所のかたに御もぎの打
ならしに御琴ともさうそくなくとして殿上人

11 (へ)梅の花たちよるはかり有しより人のとかむる香にそしみける
12 御溝水

13 埋(三)薫物(二)日数之事掘(一)地事三尺用(三)水辺地(二)得(三)朝陽ノ理(一)也 春秋 七日
夏 五日 冬 十日 説々多シ

14 黒方 侍従 梅花

15 紫ノ上は春ヲ好給ふにより梅花をすき給

16 荷葉

17 薫衣香

18 百歩香

19 無徳

20 蔵人所ハ殿上ノ次ノ間ニ布障子ヲ立タル所也
21 打ならしは習礼也

あまた笛の音とも聞ゆ頭中将弁少将なとま

かづるをと、めさせ〔兵部卿〕宮は琵琶〔源〕おと、さつの御こと

頭中将わごん夕霧よこぶえ吹たり弁の少将

拍子とりて〔源〕梅かえいだしたる程いとおかし御かは

らけまいるに宮

うくひすのこゑにやいと、あくかれん

こゝろしめつる花のあたりに

〔源〕色も香もうつるはかりにこのはるは「(4才)

花さくやとをかれすもあらなん

〔頭中将〕〔源〕鶯のねくらのえたもなひくまで

なをふきとをせよはのふえ竹

〔夕霧〕心ありて風〔源〕のよくめる花の木に

とりあへぬまでふきやよるへき

〔弁少将〕かすみたに月と花とをへたてすは

ねくらの鳥もほ〔源〕ころひなまし

宮かへり給ふ御をくり物にみつからの御れうの御な

をしたきもの二つは奉らせ給ふ宮

花のかをえならぬ袖にうつしもて

22 執柄 大臣家ニモ有也

23 〔源〕梅かえにきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつ、

24 〔源〕花の色をあかすみらん鶯のねくらの竹に手をなふれそも

25 心ありて 笛に落梅ノ曲ある心也

26 ほころひ 朝心よけに鳥の啼事也笛をかんして鳥もなかと也

27 ことあやまりといもやとかめん「(4ウ)

〔源〕めつらしとふるさと人もまちそ見ん

28 花のにしきをきてかへる君

いぬの時に秋好の御かたに源わたり給ふ御くしあげ

の内侍なとも参れりむらさきの上も此ついてに

中宮〔秋好〕に御たいめんありねの時に御も奉る御母明石

の上はかゝるおりだにえ見奉らぬをいみしとおも

へり春宮の御元服は廿〔ハツカアマリ〕よ日の程になん有ける

梅かえの左大臣〔源〕の三君〔源〕四月に参給ぬ麗景殿

と聞ゆ姫君の御でうど、もさうし共もえらせ給

宰相の中将兵衛督頭中将なとにあしで歌え

をかけとの給へは心〔挑あらそふ也〕にいとむへかめり源はしん「(5才)

てんにはなれおはして御心のゆくかきりさうの

もたゞのも女でをいみしくかきつくし給ふ女房

二三人はかりすみすらせてけうそく〔源〕のうへにさう

し打をき筆のしりくはへて思ひめぐらし給へる

さまあくよなくめてたし兵部卿の宮もさうし

27 何たる袖のと

28 朱買臣 ふるさと人は妹也

29 御くしあげ 内侍なる人共伎ヲつとむる也かんさしする時の事也

30 忌

31 麗景殿ノ父ハ紅梅ノ右大臣也右ト左ノ書ちかへ歟

32 絵を以歌を書也

33 まな かななるへし

34 脇息卓〔ツクエ〕

もたせてわたり給へりおと、御覧しおとろきぬ
世の中に手かくとおほえたる上中下の人くにも
さるへき物ともはからひてたづねか、せ給ふ」(5ウ)

(挿絵) 「(6才)

内のおと、は此御いそきを人のうへにて聞給ふも
いみしう心もとなくさうしとおほす彼雲井の
雁の君さかりにと、のひつれくと打しめり給へは
人のねんころなりしきさみになひきなましかはと
くやしとおほす夕霧もかくたはみ給へる御
けしきを聞給へとつらかりし御心を我もしつ
めてとおほす御文はたえす夕霧

つれなさはうきよのつねになりゆくを

わすれぬ人や人にことなる

〔姫君〕かきりとてわすれかたきをわする、も

こや世になひくこ、ろなるらん」(6ウ)

(挿絵) 「(7才)

35 弘徽殿ノ女御は秋好にをされ雲井ノ雁ヲ春宮ヘトおほすに夕霧ノけかし給ふ故に
え参らせ給はす

36 寂寞さひしき也

37 こなたはわすれぬ也世上ノ人には違ひたる也

藤裏葉〔源州九才 以詞也〕

やよひ廿日大宮の御忌日にて内のおと、深草の
極楽寺にまうて給ふ君達宰相の中将も参り

給へり御ずぎやうなとは六条院よりせさせ給ふ夕霧

は此おと、をつらしとおほせは見え奉るも心づかひ

せられていたうもてしづめ給ふをおと、袖を引

よせてなとかこよなうかうじし給ふけふの御法のえ

をもたづねおぼさはつみゆるし給てよや残りすくな

き世に思ひすて給へるとうらみ給ふ打かしこまり

てゆるしなき御けしきには、かりてなと聞え給ふ

心あはた、しき雨風にみなかへり給ぬ四月のついで」(7ウ)

たち頃おまへの藤さきみたれたるに頭中将して

夕霧へ御せうそこあり内大臣

わかやとの藤の色こきたそかれに

たつねやはこぬ春のなこりを

〔夕霧〕中くにおりやまとはんふちの花

たそかれ時のたとくしくは

夕霧おと、に御覧せさせ給へは思ふやう有て

38 昭宣公建立也

39 無越キワメテノ心也

40 かうし勘当也

41 ついたち頃とは七日までを云歟 末に七日ト知ぬ

42 御ゆるしにより中くまとひたると也

ものし給へるにやあらんはやう参り給へとあり心⁴³
 やましきほとにまうで給へりあるしの君達七
 八人むかへいれたてまつる 「(8才)

(挿絵) 「(8ウ)

内のおと、おまし引つくろひ北^(内大詞)のかた女はう衆なと
 ものぞきて見給へねびまさりよういしづやかに^(夕霧)
 ものくしきかたは父おと、にもまさりざえのきは^(才)
 もすくよかにたらひたりなどの給てたいめし給ふ⁴⁴
 春の花みな打すて、ちりぬるがうらめしうおほ
 ゆる頃此花^(花)のひとりたちをくれて夏に咲かゝる
 程なんあはれにおほえ侍る色もはたなつかしき
 ゆかりにしつへしとてほゝゑみおほみきまいり
 御あそひなとし給ふおと、程なくそらゑひして⁴⁵
 藤のうらばと打ずんし給へは頭中将ふさなかきを^(才)
 おりてまらうとの御さかつきにくはふ 「(9才)

(挿絵) 「(9ウ)

〔内大〕むらさきに⁴⁶ かことはかけんふちの花⁴⁷
 まつよりすきてうれたけれども
 〔夕霧〕いくかへり露けき春を過しきて

- 43 もてしつめて参り給へり
 44 健 「スタヤカ也」
 45 へ 春日さす藤のうらはの打とけて君しおもは、我もたのまん
 46 紫にとは姫君に比して也
 47 かことはかこたれん也 松より咲こす花なれば也

花のひもとくおりにあふらん

〔頭中将〕たをやめの袖にまかへる藤の花⁴⁸

みる人からや色もまさらん

七日の夕月夜影ほのかなるに池のか、みのとかに^(才)
 すみわたり松にかゝれる藤のさまよりつねな
 らすおもしろし弁少将⁴⁹ へ あしがきうたふおと、年⁵⁰

へにける此家のと打くはへ給ふ夜更ゆくほとに^(内大)

宰相の君そらなやみをし給へはおと、頭中将に御 「(10才)

やすみ所もとめよおきなはいたうゑひす、みて⁵¹
 むらいなればといひすて、入給ぬおとこ君夢か

とおほえて女^(金井ノ雁)はいとはつかしと思へり雲井の雁

あさき名をいひなかしける川くち⁵²は

いか、もらし、せきのあらかき^(夕霧ノ調ヲ)
 (まもり目也)

〔夕〕もりにけるくきたのせきを川くち⁵⁴の

あさきにのみはおほせさらん

あくるもしらすがほ也女はう達聞えわづらふに

48 婦人^(タラヤ) 幼婦^(同) 雲井も見人からに色まさらん也

49 へ 蘆垣まかきかきわけててふこすとをひこすと二段てふこすと誰か此事をお
 やにまうよこしけらしも 三段と、ろける此家のをとよめおやにまうよこしけらし
 も

50 と、ろけるを年へけるといひかへらるゝ也

51 無礼

52 あさき名雲の親のかた也

53 川口 催馬楽也

54 白河也 六十人してもる関也

おと、したりがほなるあさいかな、ととがめ給ふ⁵⁵ ねく

たれがみの御あさかほみるかひありかし御文には

〔夕〕⁵⁶とかむなよしのひにしほるてもたゆみ⁵⁷ 〔10ウ〕

けふあらはる、袖のしつくを

おと、わたりて此文を見給けり六条のおと、もき

こしめして夕霧にけさはいかに文なとものしつやと

の給ふ⁵⁸くはんぶつて奉りて御導師をそくて

日暮て御かた⁶⁰くよりわらはへ出してふせ⁵⁹なと給へり

へたいの上みあれにまうて給ふとて御車甘はかりに

て事そぎ⁵⁹たる、もけはひこと也源はまつ⁶⁰か⁶¹の日の

暁まうて給てかへさにはたいの上の御さじきにおは

します藤内侍のすけ祭の使也夕霧は此出たち

の所にとふらひ給へり夕霧

なにとかやけふのかさ⁶¹しにかつ⁶²見つ、 〔11才〕

おほめくまでになりにけるかな

55 へくねくたれの朝かほの花秋霧におもかくしつ、見えぬ君かな

56 けふよりはとかむなよ也

57 後朝の文はかならずある物也

58 灌仏 六条院にての事也 承和七年四月八日請⁵⁸ 律師伝灯ノ大法師⁵⁹ 於⁶⁰清涼殿⁶¹

始行⁶²灌仏事⁶³ほとけを作りて水をあひせ奉也

59 布施ノ員数 寛平八年四月八日定法文ノ法 親王錢五百文 大納言四百文 中納言三

百文 参木二百文 四位百五十文 五位百文 六位并童五十文 昔ハ錢中頃ヨリ紙ヲ用

60 御形 又御生 四月上ノ酉日玉依姫別雷神ヲ産給也

61 あふひをもたせて也

62 久しくあひ給はぬ心也

〔藤内侍〕かさ⁶³してもかつた⁶⁴とらる、草の名は

かつらをおりし人やしるらん

入内には紫の上そひて参給ひ三日過してまか

てさせ給へは明石の上たちかはりて参給ふ夜紫

の上と明石の上とたいめんありておとなび給へれは

うとくしきへたてのこるましようとなつかしう物語

なとし給ふ姫君の御かたちうつくしけにひいな⁶⁵のやう

なるを明石の上は夢の心ちして見奉るにも涙のと、

まらぬは⁶⁶へくひとつ物とそみえさりけるまことに住吉の

神もをろかならず思ひしらる源はあけん年よそ 〔11ウ〕

ぢに成給ふ御賀の事おほ⁶⁷やけよりはしめおほきなる

世のいそき也其秋太上天皇になずらふ御位え

給ふてみふくは、り給ふ内大臣⁶⁸は太政大臣夕霧は中

納言也雲井の雁のめのと六位すくせとつばやし

事おりくおほし出ければ菊のうつろひたるを給

はせて中納言

あさみとりわかほの菊を露にても

こきむらさきのいろとかけきや

63 夕霧もと文章生にて有しをいへり 桂ヲおるハ及第ノ事なるへし

64 始テ対面也

65 へくうれしきも憂も心はひとつにてわかれぬ物は涙也

66 御門ノ尊号 准三后ト云心也

67 御封

68 六位ノ袍也 コキ紫ヲモ定家卿参木三位ノ歌によめり

〔めのと〕⁶⁹ 二葉より名たゝるそのゝきくなれと
あさきいろわく露もなかりき

夕霧はおとゝ一所にすみ給はんも所せければ三条殿⁷⁰ 〔12才〕
のあれたるをすりしなしてわたり給へりちいさき
木ともゝしげきかげとなり昔おほしてあはれに
おもふさまなる御すまる也夕霧

〔清水ヲさして〕⁷²
なれこそは岩もるあるし見し人の

ゆくゑはしるや宿のましみつ

女君も大宮の事をおほして

なき人のかけたにみえずつれなくて⁷³

こゝろをやるいさら井の水⁷⁴

父おとゝ内よりまかて給ふとて紅葉の色におとろ
かされてわたり給ひ有つる手ならひとものちり
たるを御覧しておとゝ 〔12ウ〕

そのかみのおひ木はむ⁷⁵へもくちぬらん
うへし小松もこけおひにけり

〔夕のめのと〕いつれをもかけてそたのむふたはより⁷⁶

69 〔へ〕露たにも名たゝる宿の菊なれば花のあるしや幾世なるらん

70 三条の宮 大宮ノ家也

71 修理

72 あるし 大宮の事也 清水は昔の人の行衛ヲ知かと也

73 水も時をえたるかほと也

74 いさら井は浅キなかれ也

75 宜

ねさしかはせる松のすゑく

神無月廿日あまりに六条院に冷行幸あり

紅葉けうあるたび⁷⁶にて朱雀院にもむまばの殿

に左右のつかさの御馬ひきならへて五月のせちに

あやめわかれすひつじくたる程に南のしんでんに

うつりおはします道の程そり橋わた殿には錦を

しきぜん上⁷⁷をひき東の池に船ともうけみづし所⁷⁸

のうかひのおき院の鵜かひめしならへておろさせ 〔13才〕⁷⁹

給へりちいさきふなともくひたり山の紅葉いつれ

をとらねと西の御前のは心ことなるを中のらうの

かべをくづし中門をひらきて御覧せさせ給ふ御

座ふたつよそひてあるしの御さはくたれるを宣

旨ありてなをさせ給ふ池の魚を左の少将とり

蔵人所の鷹かひ北野にかりつかうまつる鳥⁷⁹

一つかひを右のすけさ⁸⁰、げてしんでんのひかし

より出て御はしの左右にひぎをつきてそうすお

ほきおとゝおほせ事給りてうしておもの⁸¹に

まいる暮かゝる程に殿上のわらはへ舞つかうまつる

賀王恩そうする程におほきおとゝの御子十 〔13ウ〕

76 御せうそこありておはします先巳の時に〔翻刻者注〕本文「院にも」「むまばの殿」
の間に挿入

77 軟障

78 みつし所 主上ノ御膳ヲつかさとる所也

79 鷹飼は蔵人所所掌也 近衛隨身等御鷹飼に補せらるゝ也

はかりなるおもしろうまふみかと御そ給ふとお
りてぶたうし給ふあるしの院菊をおり昔おほし出

色まさるまかきのきくもおりくくに

袖うちかけし秋をこふらし

〔太政大臣〕へへむらさきの雲にまかへるきくのはな

にこりなき世のほしかとそ見る

かたちおかしきわらはべ家の子とも青きあかき

しらへへつるはみすわうゑびぞめきてみつらひたいば

かりのけしきをみせてみしかき物共をまひ

て紅葉のかけにいる程日の暮るもおしけ也」(14才)

(挿絵) 「(14ウ)

〔院〕秋をへて時雨ふりぬるさと人も

かゝるもみちのおりをこそみね

〔御〕よのつねのもみちとやみるいにしへの

ためしにひけるにはのにしきを

夕霧笛 弁少将声すくれたり紅梅大臣是也

80 朱雀院 聖代ヲこふ也

81 堯生れ玉フ時紫雲出たり徳星ト云聖代ノ嘉瑞也 又禁中ノ事をも紫ト云也

へへ久かたの雲の上にて見る菊は天ツ星とそあやまたれける

82 青キ 白つるはみ 赤キ 白橡 二色アリ

83 へへつるはみのきぬきし人は事なしといひし時よりきまほしくおもほゆ 万葉二
アリ 四位以上ノ人ノきるきぬ也

84 ふりぬる里人は院の御身也

85 朱ノ御代の紅葉賀ノためしをひくと也

若葉上 「源州九才より四十一まで」

朱雀院はありし行幸の後あつしくなやみわたらせ

給ひ此たびは物心ほそく年ごろおこなひのほゐ

ふかきを御母后おはします程はとおぼしとゞこ」(15才)

ほりつるを今は猶其かたにもよほすにやあらん宮

たちは春宮を、き奉りて女宮四所おはします

中に藤つほの御腹の女三の宮をかなしき物にかし

つき聞え給ふ御年十三四はかりにおはす世をそ

むき山籠し給ふ後たれをたのむかげにものし

給はんと朝夕にうしろめたくおぼしなげく御たから

物御でうど、もはかなきあそび物までたゝ此御

かたにわたし奉らせ給ふ西山に御寺つくりてう

つろはせ給はんの御いそぎ也」(15ウ)

(挿絵) 「(16才)

御なやみにそへての御心つかひきこしめして春宮も

御母承香殿もわたらせ給ふ宮には世をたもち給はん

事こまかに聞えさせ給ひ暮行まゝにをもく成

まさらせ給へは六条院より中納言の君参給へる

をよろこひおほしめしみつからとふらひものし給ふ

86 悪后うせ給ふよし此巻に見えたり

87 猶其かた 御出家

88 女一 女二 落葉 女三 御母藤つほ 女四

へきよし申給へなと打しほたれつゝ、の給ふ此夕霧
のかたちさかりにきよなるを御めと、めてこの
もてわつらはせ給ふ姫宮を此人にやとおほしより
けり十九才なれどこよなき位にもすゝみざえ
の程も父おとゝにはをとるまじなど、おほしめさる
めのとゝもめし出て御もぎの事の給はするついでに
六条のおとゝの式部卿のむすめおふしたてけんやう
に此宮をあづかりはぐゝまん人もかな内には秋好中
宮女御たちもやんことなきかぎり物せらるゝに
はかゝしきうしろみなくてましらひいと中ゝ
ならんめのと女房衆は夕霧をと申也されどお
とゝにあつけ聞えをかはあまたの中にかゝづらひて
めざましき思ひはありともやかておやざまにてめや
すかりなんふりせぬあだげこそはうしろめたけれ
どいくはくぬ世のあひだは彼人のあたりにふれば、
せまほしけれわれ女ならばはらからなりともかな
らすむつびよりなまし女のあざむかれんはこと」(17才)
はりそやとの給ふ御めのとのせうと左中弁源にも
此宮にも心よせつかうまつるにめのとしかゝ御け

- 89 冷眼
90 ふりせぬ 古びざる色好み也
91 ふれはふ 触
92 あさむかれん 愛せられん也

しきありと彼院にもらし給へとかたるこの御
うしろみのそむ人々あまたあれどきのふまてた
かきおやの家にあがめかしづかれし人のむすめけふ
はなをくじくだれるきはのすきものどもに
名をたちおやのおもてぶせかげをはづかしむる
たぐひもありあしくもよくもさるへき人の心にゆ
るしきたるまゝにて世中を過すはすくせゝに
て後の世にとろへあるともみつからのあやまちには
ならず人もゆるさぬに心つからの忍びわさし出」(17ウ)
たるなん女のきずとおほゆ堂兵部卿はなよひよ
しめきをもきかたをくれたり大納言の朝臣の
家つかさのそむは物まめやかなる事にはあなれどを
しなへたるきはゝめさましくなん有へき柏右衛門督
はまだ年わかつてむげにかろびたり六条院に
こそおやざまにゆづり聞えさせめと御けしきあ
れは院の御世の残りすくなしとてこゝには又いく
ばくたちをくれ奉るへしとてか其御うしろみをは

- 93 崇愛
94 なをくしく 平人ノ心也
95 すきもの 好色にすきタルもの共也
96 おもてふせ つらうちと云心也
97 すくせ 宿世 宿習也
98 大納言 系図になき人也院ノ別当なるへしおりみの御門又親王家にめしつかは
るゝを云也 女三宮ノ家司ヲ望む也
99 中将也 始テ右衛門督ト見えたり

うけとりきこえん中く世をさらんきさみ心
 くるしくほだしになん有へき中納言などはかるく
 しきやうなれどゆくさきとをくて人がらもつ」(18才)
 ゐにおほやけの御うしろみとも成ぬへきおひさきな
 ればとまめだちてみつからはおほしはなれたるさま
 なるを弁もことはりにいとをしくも口おしくもお
 もひてうちくにおほしたちにたるさまなとくはしく
 聞ゆれば院さすかに打ゑみてさらは内にこそた
 てまつらめ人々おはすとてそれによるへき事にも
 あらす古院の御時に大后のいきまき給しかと
 すゑに参給へりし入道の宮にはしばしをされ給に
 きかし此女三の御母女御こそは入道の宮の御はら
 からのものし給ふれかたちもよしといはれし人也
 しかはいつかたにつけても此姫宮はをしなへてのきは」(18ウ)
 にはおはせじとおほす也年も暮ぬ女三の御もぎ
 の事かへ殿の西おもてに御帳よりはしめもろこし
 の后のかざりおほしやりてか、やくはかりと、のへ
 給へり御こしゆひにはおほきおと、大臣たち上達部
 みこたち八人殿上人はたさらにもいはす内春

- 100 小大
 101 息巻 いかる事也
 102 柏殿 朱雀院にある殿也 柏梁殿也 皇后ノおはします西ノ対也 悪后住給ふかた也
 103 嵯峨天皇弘仁八男女被服用唐法

宮残らすいかめしきひゞき也六条院よりをく
 り物とも人々のろくなと奉らせ給ける秋好中
 宮より御さうそく昔人内の時参らせられし
 御ぐしあげのぐあらためくはへて夕つかた奉らせ給ふ
 「中宮」さしなからむかしをいまにつたふれは
 玉のをくしそかみさひにける」(19才)
 院御覽しつけてあはれにおほし出らる御
 さしつきに見る物にもかよろつよを
 つけのをくしもかみさふるまで
 此御いそき三日過してつゐに御ぐしおろし給ふ
 おほろの内侍のかんの君はつとさふらひてかく思ひ
 しみ給つるわかれのたへかたくもあるかなとて御心
 みたれぬ山の座主御いむ事のあざり三人ほう
 ぶくなど奉る女宮たち女御更衣おとこ女かみ
 しもゆすりみちてなきとよむ」(19ウ)
 (挿絵) 「(20才)
 六条院も参給て此かたのほゐふかくす、み明し
 を心よはくてをくれ奉り侍ぬる心のぬるさはつか

- 104 さしなからはさなから也
 105 中宮ノさしつき二女三ヲト思召ス也
 106 にもかもかなの心也
 107 いむ事 受戒
 108 法服
 109 鳴動

- 110 たとりすくなく物の思ひわけすくなき也
 111 饗精進物
 112 浅香
 113 御鉢
 114 いなひす 不辭
 115 いみしき つよき心也

しく思給へらるゝかなとなくさめかたくおほす
 院は此内親王^{女三}ひとりの御事を源にはぐゝみさる
 へきよすがをおほし^〇ためてあつけ給へと聞え
 まほしくおほす源は中納言^{分務}はまだ位あさくてた¹¹⁰
 どりすくなくわれはゆくさきみしかくてつかう
 まつりさす事や侍らんとうたかはしきかたのみなん
 心くるしく思ふ給へなからうけひき申給つ夜
 に入ぬれは御ある¹¹¹しの事さうし物にてせさせ給ふ
 院のおまへにせんかうのかげばんに御はちなと昔に¹¹²
 かはりて参る夜ふけて帰給ふ院はけふの雪にいと、
 御風くはゝりてかきみだりなやましくおほさるれと^〇
 此宮^{女三}の御事聞えさだめつるを心やすくおほしけり又
 の日紫の上に御物語聞えかはし院のたのもしげなく
 成給にたる御とふらひに参て女三の御事をすてが
 たくなんの給ふをえいなひず成にしことくしくそ¹¹⁴
 人はいひなさん御山すみにうつろひ給はん程にこそ
 わたし奉らめいみしき事ありとも御ためよにかはる¹¹⁵
 事は有ましきを心なをき給そとの給ふはかなき御^源

「(20ウ)

- 116 放出 廂也
 117 壁代しろき絹ヲかたひらのやうにしてかけわたす物也
 118 地鋪 唐筵に大文高麗縁ヲ付る也
 119 茵
 120 脇息
 121 螺鈿〔アラカイ也〕
 122 御厨子 衣篋
 123 香壺 葉篋
 124 泔器〔ユスルツキヒンタライ也〕
 125 搔上〔カ、ケ〕打乱篋也
 126 兩人の子を見せ参らせらるゝ心也

すき心を紫はめさましき物におほす年もかへりぬ
 朱雀院には姫宮六条院にうつろひ給はん御いそぎ也」〔21才〕
 源四十に成給へは御賀の事正月廿三日ねのひなるに^〇
 左大将の北方〔玉かつら也〕わかな参り給ふ玉もわたり給ひて
 南のおとゝの西のはなちいてにおましよそふ屏風¹¹⁶
 かべしろ御ぢしき四十まい御しとねけうそくらでん¹¹⁷
 のみづし二よろひ御衣はこ四つ夏冬の御さうそく¹²²
 かうごくすりの箱御すゝりゆするづきかゝげのはこき¹²³
 よらをつくし給へり人々参給ておましに^〇出給ふとて
 かの君に御たいめんありおさなき君もうつくしうて^{玉かつらの子達}
 ふたりおなしやうにふりわけがみのなをしすかた〔三四才也〕
 〔玉〕わかさはさす野への小松をひきつれて¹²⁶
 もとのいはねをいのるけふかな」〔21ウ〕
 (挿絵) 「(22才)

〔源〕小松はらすゑのよはひにひかれてや
野へのわかなもとしをつむへき¹²⁷

上達部あまた南のひさしにつき給ふ紫の上の

父式部卿宮大將^{〔孫〕}むまごの君たち中納言御かはらけ¹²⁸

わかなのあつ物まいるこものよそえたおりひづもの¹²⁹
^{〔四十枝〕}

よそぢおまへにはぢんのうけばん四御つき¹³¹朱雀院¹³²

たいらぎ給はぬにより楽人などはめさす御ふえ^{〔〕}

おほきおと、和琴衛門督^{〔我仕〕}きんは兵部卿宮おまへに^{〔木〕}

ひかせ給ふ御をくり物あり二月十日女三宮六条院^{〔全サラキ〕}

へわたり給ふ女はうのつほねくしつらひみか、せ三日¹³³

が程はよがれなくわたり給へはむらさきの上」(22ウ)

へへめ¹³⁴にちかくうつれはかはるよの中を

ゆくすゑとをくたのみけるかな

〔源〕命こそたゆともたえめさためなき¹³⁵

よのつねならぬなかのちきりを

女三へとみにもえわたり給はぬを紫の上かたはら

127 源も年をつまんと也

128 わかなのあつ物 羹ノ御肴也

129 こもの 猷物又籠物 枝に付たるとあれは籠物なるへし

130 折櫃物 四ツ、ノ数ハ四十賀ノ故也

131 土器〔ツキ〕

132 御悩無平癒

133 よかれ 夜ヲへたてたる也

134 へへ 秋萩の下葉につけてめにちかくよそなる人の心をそみる 貫之

135 命はたゆるとも契りはかはらしと也

いたきわざかなとぞ、のかし聞え給へは渡り給ふ源の
女はうたち中務中將の君なとめくはせつ、あま

りなる御おもひやりかなといふ源は夢におとろ

きて出給ひ雪は^{〔ママ〕}さえ残りたるに紫の御かたの御^{〔ミ〕}

かうし打た、き給ふに人々そらねをしつ、や、

またせ奉りてあけたり上^{〔紫ノ上ノ〕}の御ぞ引やりなとし」(23才)

給ふに涙ひきかくしてさすがにうらみたる御け

しき也その日は女三へ御文つかはさる源

¹³⁶ 中みちをへたつる程はなけれども

こゝろみたる、けさのあは雪

梅につけ給へり此花を紫へおりてみせ給ふに

女三の御返し^{〔女三ノ〕}まいるめのとの歌

¹³⁷ はかなくてうはのそらにそきえぬへき

風にた、よふ春のあは雪

けふはひるわたり給ふ何心なく物はかなき御程に

てた、児のおもぎ¹³⁸らひせぬ心ちしてうつくしき

さまし給へり院のみかと二月に嵯峨の御寺にうつ」(23ウ)

ろひ給ぬ六条院へも紫の上へも院より御せうそこあり

そむきにし此世にのこるこゝろこそ

136 かよふ中ノ道也

137 朱より源ヲ頼みて女三ヲ参らせるゝに夜かれし給へは行末おほつかなきとめのと

138 おもきらひ 面よはき也

いる山みちのほたしなりけれ

〔紫上〕¹³⁹そむくよのうしろめたくはさりかたき

ほたしをしゐてかけなはなれそ

女御更衣たちをのがじ、わかれ給ふも哀なる事

なんおほかりける内侍のかんの君は二条の宮にそ住給ふ

院は姫宮と此かんの君をかへりみかちにおほしたり

おと、哀にあかずおほして昔の中納言の君その

せうとのいつみの守してせうそこ聞え給ひ紫の

上にはひたちの君へといつはりてよひ過てかんの」(24才)

君へひそかにおはしたり 源

年月をなかにへたて、あふさかの

さもせきかたくおつるなみたか

〔おほろのかんの君〕なみたのみせきとめかたき清水にて

ゆきあふみちははやくたえにき

日さし出る程に出給ふとて藤の花をおらせて

〔源〕しつみしもわすれぬものをこりすまに

身もなけつへきやとの藤なみ

〔かんの君〕身¹⁴³をなけんふちもまことのふちならて

かけしやさらにこりすまのなみ

139 山中へは御無用と也

140 自恣〔ホシイマ〕をのかさまくも也

141 涙のみせきかたくしてあふ事はたゆると也 あふ事には関あると也

142 藤は淵也

143 身をなくる淵ならば波のかゝるもいとふましきにと也

夏の頃より明石の姫君た、ならすなやみ給て」(24ウ)

女三のおはします東おもてに御かたしつらひたり

十三才也明石の上今は御身にそひ出入給ふもあらま

ほしき御すくせ也¹⁴⁴たいの上此姫君へわたり給ふ

ついてに女三にもたいめし給ふ思ふやうなる御かた

らひと源は打ゑみ給へりたいの上手ならひに

身にちかく秋やきぬらんみるまゝに

あをはの山もうつろひにけり

〔源〕水鳥¹⁴⁵のあをはは色もかはらぬを

萩のしたこそけしきことなれ

明石の姫君はじちの御母よりもたいの上をむつま

しくたのみ聞え給へり中の戸あけて女三にもた」(25才)

いめし給ふ女三の御母と式部卿とは御はらからなれは

いとこ也中納言のめのもめし出さるゝ、源四十才今年は

御賀につけて行幸も有へれどいなひ申給ふ

しはすの廿日あまり秋好中宮よりならの京の

七¹⁴⁶大寺に御ずぎやう布四千だん此京の四十寺

にきぬ四百疋をわかつてせさせ給ふ夕霧中納言

右大将になさせ給へり院¹⁴⁷もいとかしこくおとろき

て御座につき給ふまんざいらく賀王恩まひて

144 宿世

145 源ノ心は水鳥の羽也 紫ノ心何とやらんかはりたると也

146 東大寺 興福 元興 薬師 西大 大安 法隆寺也

けふのさほうこと也御馬四十疋¹⁴⁷ 六衛府¹⁴⁷の官人

引とゝのふるかゝる時も花ちるはよその事におほしめせど此大将^{タテマシ}の君の御ゆかりにいとよくかず」(25ウ)

まへられ給ふ也姫君は二月はかりより御けしきか

はりてなやみ給へは北の町の中のたいにわたした

てまつり御ずほうのげんざ共のゝしるあま君いとめて

たう見奉るまゝに

おひのなみかひあるうらにたちいて、¹⁴⁹

しほたるゝあまをたれかとかめん

〔姫君〕しほなるゝあまをなみちのしるへにて

たつねも見はやうらのとま屋を

〔明石の上〕世をすてゝあかしのうらにすむ人も

こゝろのやみははるけしもせし

三月^{ヤロト}の十よ日の程におとこ君生れ給ふ紫の上」(26オ)

おやめきてわか宮をつといたきおはすれはたゝ

まかせ奉りて明石の上は御ゆどのゝあつかひなどを

つかうまつり給ふ七日の夜は内より御うぶやしなひ

の事あり御子たち大臣われもゝときよらを

つくし給へり紫の上あまがつてつからつくりおはする¹⁵⁰

147 衛門 兵衛 近衛

148 夏の頃よりなやみ給ひ二月はかりよりその氣つきてなやみ給ふ也

149 尼は本望也

150 天児はふ子也

もいとわかゝし」(26ウ)

〔挿絵〕」(27オ)

彼明石の入道つたへ聞て今なん此世のさかひを

行はるるへきと弟子ともにいひて家をは寺になし

あたりの田は寺の事にしをきて此国のおくの郡

に人かよはぬ山あるを年ころしめをき明石の上¹⁵¹

へ文を奉れ給へり其文には若宮のよろこひとむかし

姫君の生れ給はん年の二月の夢にすみの山を¹⁵¹

右の手にさゝげ山の左右より月日のひかりさやか

にさし出て世をてらすみつからは山のしものかげ

にかくれて其ひかりにあたらす山をは広き海

にうかへちいさき舟にのりて西のかたをさして

ゆくとなん見侍し思ひのごとく国¹⁵²の母と成給へは」(27ウ)

住吉の御社をはしめ願ともはたし給へ我は此思

かなひぬれは十萬億の国へだてたる九品のうへの

のそみうたかひなし

ひかりいてんあかつきちかくなりにけり¹⁵³

いまそ見しよの夢かたりする

とて月日かきたり命をはらん日もさらになしろ

しめしそ藤衣にもやつれ給ふなたゝへんげの

151 須弥山

152 国母也

153 春宮世ヲもち給ふへき也 又入道闇より明におもむく心とも云り

ものとおほし^〇なしてくどくの事をつくり給へ後の

世のたいめん侍なんとあり願文ともはぢんのはこに

ふんじこめて奉給へり尼君へは此月の十四日に草の

庵まかりはなれてふかき山にいりくまおほかみ」(28才)

にも身をせし侍りなんあきらかなる所にて又たい

めんはありなんとのみあり使の大ともも麓までを

くりてみなかへり僧一人わらは二人御ともにさふらふ

御琴ひわは仏にまかり¹⁵⁵申て御堂に施入し給

残りの物は弟子六十よ人にみなそうぶし給ふと

申す院^源も此文を見給てあはれとおほすへ柏木

右衛門督は院^末につねにしたしくさふらひて女三

の宮の御事聞えよりしかどかくことさまになり

給へるを口おしく猶思ひはなれす其おりよりかた

らひける小侍従といふ御ちぬ^{女三}しのたよりに聞えつ

たふるをなくさめに思ふそはかなかりけるやよひ
「(28ウ)

の空うら、かなる日六条院に兵部卿宮衛門^道のかみ

参り御物語なとし給つれ^〇にまきる、事なしや

こゆみいさせて見るへかりけり大將^{夕暮}はうしとらの

町に人々あまたまり¹⁵⁷もてあそは^〇してときこしめし

154 来世

155 賽「マカリマウシ」

156 かくことさまに源へ参らせられ給へは也

157 鞠 黄帝所作 天智天皇ノ時元興寺ニ大ナル槻ノ木アリ是ヲカ、リトシテ 帝 内大

臣鎌足入鹿ナトシテ御鞠アリ

こなたにとあれば若きんだちまりもたせてまい

れりしんでんの東おもてよしあるか、りの程を尋て

立いつ頭の弁兵衛のすけ大夫の君大將^〇かんの

君もみなおり給て花の陰にさまよひよきあ

しきけぢめあるをゑもんのかりそめに立ましり

給へるあしもとにならぶ人なかりけりおと、も宮^源も

すみのかうらんに出て御覧す大將^{夕暮}は桜¹⁵⁸のなをし
「(29才)

かろくしくもみえず花の雪のやうにふりか、れは

見あげて枝すこしおりて御は¹⁵⁹しの中のしな程に

る給ぬ^柏かんの君は桜はよぎてこそなどの給ひつ、

宮^{女三}の御前のかたをしりめにみれはみすのつまく

すきかげとも見ゆからねこのちいさきを少し

おほきなるねこをひつゝきてみすのつまよりはし

りいつるに人々さはぎてきぬのをとなひみ、かし

かましねこはまだなつかぬにやつながくつきて

みすのそばあらはに引あげられたるをとみに

引なをす人なし几帳のきはすこし入たる程に

うちきすがたにて立給へる人あり紅梅にやあらん
「(29ウ)

こきうすきあまたかさなりさうしのつまのやう

158 白シ

159 御階

160 過「ヨグル」

161 掛「ウチキ」上にきる物也

にみえて桜〔表裏共ニスハウ〕のをり物のほそな162がなるへし御ぐしの
すそにさやかに七八寸はかりそあまり給へるいひ

しらす〔母〕あてにらうたけ也ねこのいたくなけは見
かへり給へるおも〔女三〕、ちもてなし〔カホ〕いとおいらかにてわ

かくうつくしの人やとふと見えたり大将タ霧心をえ

させて打しはぶき給へるにそやをらひき入〔剛也〕

給ふかん〔船〕の君ねこをまねきよせてかきいだき

たれはかうばしくてらうたげになくもなつかしく

思へりおと〔源〕、御覧しおこせてたいの南おもてに

入給へれはみなそなたに参り給ぬ」(30才)

(挿絵) 「(30ウ)

宮もゐなをり給へは殿上人はすのこにわらうだ165

めしてつばいもちいなしかうじやうの物さま166く

箱のふたにとりませつ、あるをくふ大将かんの

君ひとつ車にてみちの程物語し給ふかんの君

いかなれは花にこつたふうくひすの167

さくらをわきてねくらはせぬ

162 ほそなか 袖なし也

163 いひしらす いはんやうもなき也

164 おいらか まことに也 真実也

165 わらうた 座也

166 椿餅

167 鶯は源に比して 桜は女三にして

〔夕大将〕 〈へ〉 み山木にねくらさたむるはことりも168 〔源〕

いかてか花のいろにあくへき

かんの君むねいたくいぶせければ小侍従へ文やり給ふ169

よそに見ておらぬなきはしけれども

なこりこひしき花の夕かけ」(31才)

これを見せ奉れはみすのつまおほしあはせらる、
おと〔女三〕、のつねに大将〔夕霧〕に見え給ふなといましめ給ふを

おほし〔船〕いつ御返りは小侍従

今さらにいろにないてそ山さくら

をよはぬえたに〔源〕こ、ろかけきと

をよはぬえたに〔源〕こ、ろかけきと

若葉下 〔源四十一才より四十七まで 以詞〕

殿上ののりゆみ三月は御傳雲ノき月なれは口おしと思ふ170

に六条院にあるへしとて左右大将すけたち」(31ウ)
殿上人とも参給ふゑもんのかみは人よりことになかめ171

をしつ、物し給へは夕霧の御めには見つけ給へりみつ〔船〕

からおと〔源〕、を見奉るにけをそろしくまばゆくお172

168 〈へ〉 み山木によるはきてぬるはこ鳥のあけはかへらん事をこそおもへ

169 いふせきは物かなしき也

170 是ハ臨時也 賭弓 正月十八日臨時にもおこなはる棚二的ヲカケテ左右ノ近衛兵衛

などの舍人射る也左右ノ大将射手ヲ奏セラル負方罰酒ヲ行フ也

171 なかめ 物思ひの姿也

172 及なき心をそる、心也

ほけなき事と思て彼ねをだにえてしがなかつ
はらさひしきなくさめにもなつけんと思ふに物

ぐるおしいかてかはぬすみ出んとそれさへそかたき事也

内の御ねこのあまたひきつればらから共の所々

にあがれて春宮にも参れるを衛門督見て六条

院のねここそおかしう侍れと申給へは春宮猫を

らうたくせさせ給ふ御心にてきりつほより聞え

させ給ければ女三よりまいらせらる日頃へてかんの君」(32才)

春宮に参り御琴などをしへ給ふとて御ねこ

ともあまた侍りける彼見しかとたつねて見つけ給

へりこれはしばし給りあづからんと申給てよる

ひるかきなて、

恋わふる人のかたみとたならせは

なれよなにとてなくねなるらん

いよ／＼らうたけになくをふところに入てなかも

る給へり彼ひげくろの御むすめのまき柱の君をかん

の君にあはせんとあれど猫には思ひおとしおも

ひよらぬそ口おしかりける此姫君は兵部卿宮に

のたまひあはせ給ふ」(32ウ)

(挿絵) 「(33才)

冷泉院御くらゐにつかせ給て十八年にならせ給ふ

173 あかれて 別て也

174 旁「イタハル」

日ころをもくなやませ給ふ事ありて俄におりる
させ給ぬ朱雀院の御子春宮 打つぎてけぢめも

なかりけりおほきおと、ちじのへう奉りてこも

りぬ給ぬ髻くろの左大将右大臣に成給ふ明石

の御はらの一の宮坊にぬ給ぬみこたちあまた

かずそひて御おほえならびなし「源四十六才也」年月

ふるまゝにむらさきの上と源の御中へたて見え給

はぬ物から今はかうおこなひのみちにもと思ふよは

ひ也さるへきさまにゆるしてよと聞え給ふおほく

あるを源みつからふかきほゐあれど御有さまの□」(33ウ)

しろめたきによりこそながらふれ我そのほあとけ

なん後にともかくもおほしなれと聞え給ふへ春宮の

女御の御いのりのため彼箱あげ給て院の御物まう

てに事よせて女御殿たいの上はひとつ車也次の

車には明石の上あま君人だまひうへの五つ女御

殿の五つ明石の御あがれの三つ目もあやにかざりたり

かんだちめ舞人御馬くら隨身小舎人又なき見物也

十月中の十日なれば「神のいがきにはふくずも色かはり松

175 結目 驗

176 (翻刻者註) 本文判読不能。朱で「う」と訂正。再版本では本文「う」に修正

177 住吉詣也

178 あかれはなかれ也 流

179 「へ」ちはやふる神のゐ垣にはふくずも秋にはあへすうつろひにけり

の下紅葉などをとのみ秋をきかぬがほ也¹⁸⁰もとめ子は
つる末に上達部かたぬぎており給ふ二^{明石上}の車に忍ひて

〔源〕たれか又こゝろをしりてすみよしの¹⁸¹「(34才)

神よ¹⁸¹をへたる松にことゝふ

〔尼君〕すみの江をいけるかひあるなきさは¹⁸²

としふるあまもけふやしるらん

明石の上独吟に

むかしこそまつわすられねすみよしの

神のしるしを見るにつけても

廿日の月はあるかにすみて海のおもておもしろ^{紫上}したいの上
はかく都の外^{紫上}のありきはならひ給はねはめつらしくて

〔紫上〕すみの江の松に夜ふかくをく霜は

神のかけたるゆふかつらかも

〔女御〕神人の手にとりもたるさか木はに¹⁸³「(34ウ)

ゆふかけそふるふかき夜の霜

〔たいの上の中務の君〕はふり子かゆふうちまかひをくしもは¹⁸³

けにい¹⁸³ちしるき神のしるしか

ときはの陰に花の錦をひきくはへたると見

ゆるうへのきぬの色くをきてかけはん取つゝ¹⁸³

き物まいる尼君のおまへにもせん^{浅香}かうのおしき

180 求子 神楽也

181 須磨などの事也

182 神力

183 いちしるき 納受也 尤しるき也

あをに¹⁸⁴びのおもてをりてさうじ物まいらす此^{精進}

あま君をはよろづの事につけてめであさみ世

のことくさにて明石の尼君とそさいはひ人に

いひける彼近江の君はすく六うつ時も尼君く

とそさいはこひける¹⁸⁴「(35才)

〔挿絵〕「(35ウ)

春宮の御さしつきの女一の宮を^{紫上}たいの上とりわきて

かしつきつれく^源なるよがれの程もなぐさめ給ひける

夏^花の御かた御むまごあつかひをうらやみて大将^夕の君の

内侍^花ばらの君をむかへてかしづき給ふへ入道^未のみか

どは女三の宮に今一たひたいめんあらまほしきを^{源心}五

十^{イソチ}にたり給はん年わかなゝとてうしてやとおほして

さまく^{イソチ}の御ほうぶくしつらひ舞人楽人など

をとゝのへ給ふ年かへりてまづおほやけよりせさせ

給へはすこし程過して二月十よ日源よりとさだ

め給へり右^{七ヶクロ}の大殿の御子二人大将^夕の御子兵部卿^源の宮の

わらはうち^{内々}く^源の御こゝろみに女三のおはしますしん¹⁸⁴「(36才)

でんにみなわたし奉り給ふたいの上よりわらはべ

四人女御殿^{明石}よりのわらは明石の御かたの四人女三の

御かたにもわらはべつくるはせ給へり明石の御かた琵琶

琵琶むらさきの上わごん女御さうのこと女三はきん

184 織物ニテ張タル也

大将^タひやうしとりてさうがし院¹⁸⁵も時く扇うち

ならしてくはへ給ふと¹⁸⁶うろこなたかなたにかけたり

女三の方を大将のそき給へ¹⁸⁷は人よりけにちいさ

くうつくしげにて二月の中の十日はかりの青柳の

しだりはしめたらん心ちして鶯の羽風にもみ

だれぬへくあえかに見え給ふ¹⁸⁸〔廿四才也〕女御^{明石ノ}の君は藤

の花の夏にかゝりてならぶ花なき朝ほらけの心ち」〔36ウ〕

そし給ふ〔懷妊の程也〕なやましくおほえ給ければ御琴も

をしやりてけうそくにかゝり給へり紫の上は桜に

たとへても猶ものよりすぐれたるけはひことに物し

給ふ〔卅七才也〕明石の上はさ月まつ花たちはなの花

もみもくしてをしおれるかほりおほゆ源は紫の上の

御かたにて人々のうへをかたり給て女三へわたらせ

給へり其夜の暁がたより紫の上むねをなやみ給へは

源へ女御の御かたよりせうそこ聞え給ふにおとろき

いそきわたり給ふいとくるしげにてはかなきくだ

物をたに物うくし給ておきあかり給ふ事たえて

日ころへぬ心ほそかなしと見給ふ御賀のひきも」〔37才〕

しつまりぬ院より御とふらひたひく聞え給て二月

も過ぬこゝろみに所をかへ給はんとて二条院に

わたし給ひ御ずほうなと取わきてつかうまつらせ

給ふいとたのみすくなくよりはり給へはいかさまにせん

とまどひつゝ女三の御かたへも源はわたり給はす院^{六巻}の

内の人々はみな二条院につどひ参りて六条院は

火をけちたるやう也女御も女一^{冷泉ノ}の宮もおはします

其頃柏右衛門督は中納言になり女三の御あねの

二の宮をえ奉りける下らうの更衣ばらなれど

彼宮^{女三}のなぐさめがたきを人めにとがめらるましき

ばかりにもてなし聞え給へり小侍従といふかたらひ」〔37ウ〕

人は女三のめのとのむすめ也そのめのとのあねは柏木

中納言のめのとなれは小侍従をよびとりてかたらひ

給へりいかにく日々にせめられ¹⁸⁹こうしてさるへき

おりうかゝひつけてせうそこしおせたり衛門督

よろこひ忍ひておはしぬ四月十日也あすの

みそぎ¹⁹⁰みんとて人々は物ゐひけさうしいとまな

げにて御前のかたしめやか也柏をは御帳の東おも

てにすへ奉る女^{女三}は何心もなくおほとのごもりてお

とこのけはひすれば院^源のおはするとおぼしたれは

いがきおろし奉るに物にをそはるゝかと思あげ

給へはあらぬ人^{女三}也あさましくむくつけく成て」〔38才〕

人めせど参るもなし水のやうにあせもながれて

185 唱歌

186 灯籠

187 勝也 実也

188 よはくひわづ也

189 困〔い〕うして

190 齋院 御禊 毎年中ノ午日也

哀にらうたけ也よろつかたらふるに思ひしづむる
心もうせていづちへもゐてかくしてわか身も世
にふるさまならす跡たえてやとまで思みたれぬ¹⁹²
彼みすのつまをねこのつなびきたりし事も

聞え出たりげにさはたありけんよと口おしく契り
心うき御身なりとかなしくておさなげになき
給ふあけゆくけしきなるにかきいだきて出る
屏風を引ひろげて戸をあけたれはよべいりし
南の戸はあきながらある物をいはんとし給へどわ
な、かれていとわか／＼しき御さま也 柏木 」（38ウ）

おきてゆくそもしらぬあけくれに

いつくの露のかゝる袖¹⁹³（へ）なり

〔女三〕 あけくれの空にうき身は消なゝん

夢なりけりと見てもやむへく

玉しゐはまことに身をはなれてとまりぬる心ち
す女二の御もとにもまうて給はて大殿へそおはし
ける女三はなやましけになんとありければおと、^源
聞給てわたり給へりそこはかとするしげなる事
も見え給はすいたくはちらひてさやかにも見
あはせ給はぬを久しきたえまをうらめしくおほす^{（源）}

191 誘（キテ）

192 鞠の時也

193 （へ）涙川なかすね覚もある物をはらふはかりの露は何なり

にやといとをしくて紫の上の事なと聞え給ふ彼^{女三ノ心} 」（39才）

けしき源のしり給はぬもいとおしく心くるしく^{（船ノコト）}
おほさる^柏かんの君はましてなかつてまつりの
日は物みんとて君達^{（ツ）}いひそゝのかせどなやましと
て出給はすわらはべのもたるあふひを見給て柏

くやしそつみ^{（へ）}をかしけるあふひ草¹⁹⁴

神のゆるせるかさしならぬに

女二の宮はかゝるけしきを何事とはしり給はねど
はつかしくめさましくてさうのこと引まさぐりてお
はすさがにまめかしけれど女三にをよばさ^{（宿世）}
りけるすくせよとおほえて衛門督

もろかつらおちはを何にひろひけん 」（39ウ）

名はむつまじき¹⁹⁵かさしなれとも

おと、女三へおはしたるに紫の上たえ入給ぬとて
人参りたれは御心もくれてわたり給ひいよ／＼
いみしき願ともをたてそへげんざともめしあつめ
今しばしのどめ給へ不動¹⁹⁶そのちかひあり其日
数をたにかけと、め給へとかしらよりくろけふりを
たて、かぢし奉る月ころあらはれぬ物のけ

194 摘罪

195 かさしは兄弟ノ事也 おち葉は二ノ宮にして也

196 不動ノ本誓六ヶ月延命ト云々 大般若経ニハ定業亦能転

善無畏三藏ノ師欲シ滅弟子為^{（シ）}受^{（シ）}灌頂^{（ヲ）} 善無畏行法シテ悉ク受^{（シ）}灌頂^{（ニ）}其
後猶延命ノ事在之

ちいさきわらはにうつりてよばひのゝしる程にいき

出給ふ六条の御休所の霊也昔葵の上のさまと

おなし事とみえたり源あさましとおほしければ此

わらはの手をとらへ引すへてまことにその人か」^(御休所)(40才)

よからぬきつねなどのたぶれたるかたしかなる名のり

せよとあれば童

わか身こそあらぬさまなれそれながら

そらおほれする君は君なり

秋好中宮にも聞え給へ斎宮におはしましゝころ

ほひの御つみかるむへからんくどくの事をかならずせ

させ給へくやしき事になんありけるといへど物のけ^(源)

にむかひて物語し給はんもかたはらいなければ

ふうしこめて紫は又ことかたに忍ひてわたし奉¹⁹⁷

給ふ紫は御ぐしおろしてんいむ事のちからもやと

て御いたゞきしるしはかりはさみて五戒うけさせ¹⁹⁸」(40ウ)

給ふ物のけのつみすくふへきわざ日毎に法花経一

部つゝくやうせさせなにくれとたうとき事のせさせ

給ふ五月ははれくしからぬ空のけしきにえさ^(サ)

はやぎ給はす^(ミナ)六月に成てそ時く御ぐしもた

げ給ける女三はあやしかりし事をおほしなげきし¹⁹⁹

197 符籠

198 優婆塞——夷

199 あやしかりし 柏にあひ給てはや懷妊也

よりやかてれいのさまにもおはせすなやましくあ

をみそこなはれ給ふ御めのと達見とがめて院の

わたらせ給ふ事もたまさかなるをとつぶやく

へむらさきの上はあつくむつかしとて御ぐしすまして

すこしさはやかにもてなし給へり源はかく見給へる

こそ夢の心ちすれとの給へは紫の上」(41才)

²⁰⁰ きえとまるほとやはふへきたまさかに

はちすの露のかゝるはかりを

〔源〕ちきりをかん此世ならてもはちすはに²⁰¹

玉るる露のこゝろへたつな

かゝる雲まにさへやはたへこもらんとおぼしたちて女^源

三へわたり給ぬ宮は御心のおにゝはつかしくつゝまし

くおぼせは御いらへも聞え給はすおとなびたる人^源

めして御心ちのさまなどゝひ給ふれいのさまならぬ

御心ちにわつらひ給ふと聞ゆ年頃へぬる人く^{源心}

たにもさる事なきを不定なる事にもやとおほ^(源)

しけり二三日おはす衛門督聞ておほつかなくて」(41ウ)

文をおこせ給へり忍ひて女三に見せ奉る院入給へは^源

よくもかくし給はて御しとねのしたにさしはさみ給ふ

夕さり二条院へわたり給はんとしてひるのおましに^(紫ノ上)

打ふして御いとま聞え給ふに日くらしのなきければ

200 命は露のことくと也 程はあらし也

201 一蓮宅生

〔女三〕夕露に袖ぬらせとやひくらしの

なくをきく／＼おきてゆくらん

〔源〕まつ里²⁰²もいか、聞らんかた／＼に

こゝろさはかすひくらしのこゑ

おぼしやすらひとまり給てまだ朝すゞみの程に

わたり給はんとてよべのかはほり²⁰³をおとしてきのふ

うたゝねし給へりしおましのあたりを見給ふに御し」(42才)

とねのすこしまよひたるつまよりあさみとのうす

やうなる文のみゆるを御覧するにおとこの手也二

かさねにこま／＼とかきたるはまきるへくもなくその

人^⑧の手也と見給ふ小侍従見つけてきのふ文の色

と見てむねつふ／＼となる心ちす宮^⑨は何心もなく

おほとのごもれりあないはけなとおほして出給ぬ

侍従きのふの物^⑩はいか、と女三に申す今朝院^⑪の御らん

しつる文の色こそにて侍つれとあさましく思ふ

日をへたて、女三の懷妊を院え思ひはなたれ給

はでわたり給てもさる事^⑫見きともあらはし給はす

其頃二条のおほろのかんの君御^⑬ほゐの事し給ひ」(42ウ)

けりと聞給てとふらひきこえ給ふ

〔源〕あまのよをよそにきかめやすまの浦に²⁰⁴

202 待里は二条院也

203 かはほり 扇也 見^⑭ 蝙蝠^⑮ 扇ヲ作り始タル也 (カウモリ)

204 左遷も誰ゆへそと也

もしほたれしもたれならなくに

とくおほしたちにし事なれど此御さまたげにか、

つらひ今までもとおほし文かよはしもこれをとぢ²⁰⁵

めとおほせは心と、めてかき給ふ内侍

あまふねにいか、はおもひをくれけん

あかしのうらにあさりせし君

こきあをにびのかみにてしきみにさし給へり」(43才)

(挿絵)」(43ウ)

山のみかとの御賀十一月にて女三なやみ給へは女二

参給ふ柏木も出給ける源は紫の御なやみゆへ参り

給はす女三もわたり給はぬを院^⑯はいかなるにかと御む

ねつぶれて女三へ御文あり御返りし給へとて硯引^⑰

よせ紙とりまかなひか、せ奉り給へど御手もわな

なきてえかき給はす彼返事^⑱はつ、ますかよはし

給ふらんかしとにくけれどことはなとをしへてか、

せ給ふ十二月十日女三より朱の御賀有へし^⑲

とて舞ともならし給ふに紫も六条院へわたり

給ふ女御は里におはしますとおとこみこ生れ給ふ〔匂兵部卿是也〕^⑳

右大臣殿の北方^㉑もわたり給へりかゝる事のおり柏木^㉒」(44才)

まじらはせさらんも人あやしとかたふきぬへき事

なれは参給ふへきよしあるをわつらふよし申てまい

205 とちめは限り也

らす父おとゝもなどかかへさひ申されけるそとそゝの
かし給ふにくるしと思ふく参ぬれいのけぢかきみ
すの内にいれ給て夕大将源詞ともろ共に舞のわら

はべのういよくくはへ給へ物の師なといふものはわが

たてたる事こそあれなとなつかしくの給ふをうれし柏心

き物からことすくなにてとくたちなと思へはれ

いのやうにもあらてやうくすべり出ぬたつみの方

のつり殿につゝきたるらうをがく所〆にして山の

南のそばより御前に出る程仙遊霞あそひて雪」(44ウ)

のいさゝかちるに梅のけしきみるかひ有てほゝゑ

みたり右の大殿ヘケクロの四郎君大将殿夕霧の三郎君兵部重

卿宮の君たち二人はまんざいらく大将夕霧のすけばらの

二郎君式部卿宮の兵衛のかみの御子〆わうしやう右のお

ほいとゝゝ三郎君れうわう大将殿の太郎君らく

そんたいへいらく喜春楽まひけるゑもんのかみは盃

のめくりくるもかしらいたくおほゆれはけしきはかり

にてまきはすを源御覽しとがめてたひくし

ゐ給へは心ちかきみたりてたへかたければまだ事

もはてぬにまで給ぬるまゝにいといたくまどひ

ておとろくしきゑひにもあらぬに気のほりぬるにや」(45オ)

206 かへさひ かへりて申也 辞退ノ心

207 詞すくなく也

208 遊仙霞 舞也

いたくわつらひ給ふおとゝ母北方さはぎてよそくにて

はおほつかなしとて殿にわたし給ふ女二の宮をも今

はとわかれ奉るへきかとでにやと御休所ツヨクもいみしく

なげき給へは一条の宮にてたいらかに物し給ふまで

こゝろみ給へとてわたし給ひ御几帳女二はかりをへたて

て見奉り給ふ又母北のかたうしろめたくおほして

うらみ聞え給へはなくくかへり給ぬさる時のいう209

そくのかくものし給へは世中おしみあたらしがり

て御とふらひに参り給はぬ人なし」(45ウ)

【第七冊】

かしは木

よこふえ

すゝむし

夕きり

みのり

まほろし

にほふみや

こうはい

たけ川」(1オ)

(白紙)」(1ウ)

209 有識

柏木〔源四十八才 春より秋まで 以歌也〕

ゑもんのかんの君のなやみおこたらて年もかへりぬ^{〔柏木〕}

父おと、北のかたおぼしなけくいさ、か病のひまあ

りとて人々たちさり給へる程に女三へ文奉れ給ふ

〔柏〕いまはともえんけふりもむすほ、れ

たえぬおもひの猶やのこらん

父おと、はかづらき山よりかしこきおこなひ人さう^{〔210〕}

じて御す法どきやうなともおとろくしうさはぎ^{〔211〕}

たり此ひじりのあら、かにだらによむをあなにく^{〔柏心〕}

やつみのふかき身にやあらんだらにの声たか

きはけをそろしうていよくしぬへくこそおほゆれ^{〔212〕}

とてやをらすべり出て侍従とかたらひ給ふか、る

とが^{〔女三ノ中ノコト〕}を源にしられ奉りて世にながらへん事もまば^{〔213〕}

ゆくおほゆるはことなる御ひかりなるへしふかきあや

まちなきに調楽の時見あはせ奉りし夕の程^{〔前下〕}

よりやかてかきみだりまどひそめにし玉しる身に^{〔214〕}

210 請して也

211 陀羅尼

212 世継物語に云時平公三男敦忠ノ中納言心ち煩ひける時薬師経をよませけるに十二

神ノ内くひら大しやうと云ヲ聞て我頭ヲく、れと云そと聞て其ま、死給ぬ臆病の人
に云伝へたり 枇杷中納言の事

213 源ノ威光

もかへらすなりにしを彼院の内にあくかれありかは^{〔215〕}

〔へ〕むすひと、め給へよなとよはげに^{〔216〕}からのやうなるさ

ましてなきみわらひみかたらひ給ふ^{〔217〕}〔2ウ〕

〔挿絵〕 〔3才〕

女三もけふかあすかの心ちして物心ほそければ返

事をもし給はぬを侍従御靦なとまかなひてせめ

聞ゆればしぶくにかき給ふ忍ひてよゐのまぎ

れにかしこに参りぬしそくめして見給へは

〔女三〕たちそひてきえやしなましうき事を^{〔218〕}

おもひみたる、けふりくらへに

〔衛門〕ゆくゑなきそらのけふりとなりぬとも

おもふあたりをたちははなれし

宮は此暮つかたよりなやましくし給ふを其御けし^{〔219〕}

きとておと、にも聞えければおとろきわたり給へ^{〔220〕}

り御心のうちにはあな口おし思ひましかたなく^{〔221〕}〔3ウ〕

て見奉らましかはうれしからましとおほす夜

214 うかれ也

215 玉むすひの事也

〔へ〕思ひあまり出したまのあるならんよふかく見えは玉むすひせよ

〔へ〕恋わひてよなくまとふ我玉は中く身にもかへらさりけり

〔へ〕うつせみはからを見つ、もなくさめつふか草の山けふりたにたて

216 〔へ〕玉はみつぬしは誰ともしらね共むすひそとむるしかへのつま
217 猶や残らんとあるに^{〔222〕}そひてけふりをくらへんと也
218 思ひましかるは柏との事也

ひとよなやみて日さしあかる程におとこ君生れ

給ふ〔是かほる也〕五日の夜秋好中宮の御方より御うぶ

やしなひ御かゆとんじき五十具所々の饗院²¹⁹

のしもべちやうのめしつぎ所何かのくまゝていかめ²²¹

しくせさせ給ふ七夜は内より也源はよるはこなた

にはおほとのごもらすひるつかたなとそさしのそき給²²²

宮はならはぬ事のをそろしうおほさるれば御ゆ^{女三}

なともきこしめさす猶えいきたるましき心ちし

侍るを尻に成にてもしそれにやいきとまると心

見又なくなるもつみをうしなふ事にもやとなん「(4才)

思ひ侍るとつねの御けはひよりはおとなびて聞え

給ふ山のみかとはたいらかなりときこしめしてゆ^朱

かしうおもほすにかくなやみ給ふよしのみあれば御^源

おこなひもみたれておほしけりあるましき事とは

おほしめしなから夜にかくれて御幸あれはあるし^源

のあんおとろきかしこまり聞え給ふ宮はいくべう^{女三}

もおほえ侍らぬをかくおはしましたるついでに^{院ノみかと}

尼になさせ給てよと聞え給ふ今はかぎりのさま^{院御河}

ならはかた時の程にてもそのたすけ有へきさま

219 屯食 下臈に給ふ物也

220 饗

221 序召次所

222 ならはぬ事 初ノ産也

にてとなん思給ふるとの給へは源日ころもかくなん

と宮のの給へどざけなとの心をたぶらかしてす、」(4ウ)

むるやうも侍るなるをとて聞いれ侍らすとの給ふ御い

のりにさふらふ中にやんことなうたうときかぎりめし

いれて御ぐしおろさせ給ふかくてもたいらかにておな^{朱御河}

しうはねんずをもつとめ給へと聞えをき明はてぬに

出させ給ぬ後夜の御かぢに御物のけ出きてひとりをは^{葉の上}

とりかへしつとおほしたりしがねたかりしかは此わたりに

さりげなくてなん日頃さふらひつる今はかへりなんとて

打わらふ〔是も御休所ノ霊也〕ゑもんのかみはあまに成給ふ事を^{女二ノ}

聞ていと、きえいるやうにたのむかたなく成給けり

一条の宮に今一たひまうでんとの給ふを父母ゆる^{女三}

し給はす女二の宮をかくて見捨奉りぬるもいと「(5才)

おしくて右大弁の君にそくはしう聞え置給ふかく^{夕霧の子也}

かきりと内にもきこしめして俄に権大納言になさ^院

せ給ふ夕霧の大将つねにふかう思ひなけきとふ

らひ聞え給ふはやうよりいさ、かへたて給ふ事な²²⁴

くむつひかはし給ふ御中なれば涙をしのこひてをく^院

れさきだつへだてなくとこそ契り聞えしがいみ

しうもあるかなおほつかなくのみなどの給ふ大かた

のなけきをはさる物にて又心のうちに思ひみたる、

223 邪気

224 はやう 昔也

事の侍るを^柏かかる今はのきぎみに何かはもらすへきと

思ひ侍れど猶忍ひかたき事を誰にかはうれ侍

らん六条院^源にいさゝかのたがひめありて月頃心の「(5ウ)

うちにかしこまり申事をほいなう心ほ^後そうおもひ

なりてやまひつきぬなからんうしろにも此かうじ²²⁵

ゆるされたらんなんを²²⁶んどくに侍へきなどの給ふ

一条の宮には事にふれてとふらひ聞え給へいはまほ²²⁷

しき事はおほかるへけれど心ちせんかたなくなり²²⁸

ければ出させ給ひねとてかき聞え給ふ女御をはさ²²⁹

らにもいはす大将の御かた右おほいと、北方な²³⁰

ともいみしうなげき給女二の宮にもつゐにたいめ

し給はてあはのきえいるやうにてうせ給ぬへやよひ

の程若君のいかに²²⁹あたる日おとゝわたり給ひて

女三の御かたちのまだありつかぬ御かたはらめふりか²³⁰「(6オ)

たうわりなき心ちするとりかへす物にもがなやとむ

ねいたうさまゝにおほす若君をいだき給て

〈源〉たか世にかたねはまきしと人とは、

いかゝいはねの松はこたへん

225 かうし^〇 勘当也

226 恩徳

227 女二ノ宮ヲ也

228 手搔^イ手にてかきのくる心也 柏木は廿四五才歟

229 五十日^カ

230 わかゝしき体なれば也

しのひて聞え給へは女三は御いらへもなくひれふ
し給へり「(6ウ)

(挿絵)「(7オ)

一条の宮^{女二}は人げすくなう心ほそげ也つれゝなるひる

つかた夕大将おはしてみやす所たいめし給ふいまはの^{女二ノ御侍}

時いひをきし事もかたらひ出て 夕霧

時しあれはかはらぬ色ににほひけり

かたえかれにしやとのさくらも〈庭ノ花を見てよめる也〉

〔御休所〕此春は²³¹〈柳のめにそ玉はぬく

さきちる花のゆくゑしらねは

それよりちじの大殿に参給ふ君^{柏木ノ父}たちもおとゝの

御いてゐのかたへ入給へり一条の宮にまうてたりつる

有さま聞え給ふ おとゝ、

木のしたのしづくにぬれてさかさまに「(7ウ)

かすみのころもきたる春かな

〔夕〕なき人もおもはさりけん打すて、

ゆふへのかすみ君きたれとは

〔弁の君〕うらめしやかすみ衣たれきよと

春よりさきに花のちりけん²³²

231 〈へ〉あさみとり糸よりかけてしら露を玉にもぬける春の柳か

232 〈へ〉よりあはせて鳴なる声を糸にして我なみたをは玉にぬかなん

233 春ハ父

234 花ハ柏

卯月はかりに大将一条の宮へわたり給て柏木と
かえてと物よりけにわかやかなる色に枝さしかはしたるを

〔夕〕²³⁵ことならは²³⁶〔へ〕²³⁷ならしの枝にならきなん

はもりの神のゆるしありきと

みすのへたてある程こそうらめしけれとてなげし

によりぬ給へり 女二の宮 」（8才）

〔へ〕かしは木にはもりの神はまさすとも

人ならすへきやとのこすゑか

御休所はみたれ心ちなやましとてやをらゐさり

出給へり此大将のおなしくはかやうにても出入

給へかしと人々思ひいふ也

横笛 〔源四十九才 かほる二才 以歌也〕

柏木権大納言うせ給しをこひ忍ふ人おほかり

六条院もあはれにおほし出て御はてのすきやう

若君のためまで又心さし給ふてこかね百両をなん 」（8ウ）

234 勝（ケニ）

235 如此也

236 〔へ〕我宿をいつかは君かならのはのならしかほにはおりにおこせる返し

〔へ〕柏木に葉守の神のましけるをしらてそおりした、りなさるな柏に限テ葉守ノ
あらんト基俊云

237 葉守の神ハ右衛門督ヲさして也

238 召つかへの人々也

べちにせさせ給ける父おと、は心もしらてかしこま
りよろこひ聞えさせ給ふ山のみかとよりたかうな
ところなと女三へ奉れ給ふ

〔御〕世をわかれ入なんみちはをくるとも

おなしところを君もたつねよ

涙くみて見給ふ程におと、わたり給ひ御返しを見給ふ

〔女三〕〔へ〕うき世にはあらぬところのゆかしくて

そむく山ちにおもひこそいれ

若君いとらうたけにしろくそびやかに柳を

けづりてつくりたらんやう也かしらは露草し

ていろどりたらん心ちして口つきうつくしうま 」（9才）

みのびらかにかほりたるなとはよくおもひてらる

わつかにあゆみなとし給ふ程也御はおひ出るに

くひあてんとてたかうなをつとにぎりくひかな

くりなとし給ふおと、

〔へ〕うきふしもわすれすなからくれ竹の

こはすてかたきものにそありける 」（9ウ）

239 父おと、は柏ト女三ノ中ヲ知給はねは也

240 筭

241 野老

242 後生は一蓮宅生の心也

243 〔へ〕うき世にはあらぬところをえてしかな年ふりにたるかたちかくさん

244 そひやかちいさき也

245 眉展

246 〔へ〕いまさらに何生出ん竹の子のうきふししけき世とはしらすや

(挿絵) 「(10才)

大将は彼今夕霧はのとぢめにと、めし一ことを思ひ出
つ、おと源、に聞えまほしうゆかしきをほの聞えて
思ひよらるゝ事もあれは打出247んもかたはらいたくて
秋の夕の物あはれなるに一条の宮へわたり給へり
れいの御休所たいめんし給て昔の物語聞えかはし
故君248のつねに引給ひしことをすこし引給てみす
のものとちかくをしよせ給へど女二は引給はす大将
言啓249へへへ ことに出ていはぬをいふにまさるとは
人250にはちたるけしきをそ見る

〔女二〕ふかき夜のあはれはかりはきゝ、わけと
ことよりほかはえやはいひける 「(10ウ)

御をくり物に笛をそへて奉れ給へはあはれおほし
そひてばんしきてうになからはかり吹さして出給ふに

〔御休所〕露しけきむくらのやとにいにしへの

秋にかはらぬむしの声かな

〔夕〕よこふえのしらへはことにかはらぬを

247 (翻刻者「は」に朱で見せ消ち)

248 こ君 清てよむ也

249 へへ 心にはしたゆく水のわかかへりいはておもふそいふにまされる女二の柏の事
に恥給て引給はぬ事歟

250 いはぬをいふにまさるにてはあらぬと也

251 笛の音を比せり

252 柏ノ音声の残りてつきせぬかと也

むなしくなりしねこそつきせね

女二の宮に心かけ給ふよし雲井の雁に人の聞
えければかやうに夜ふかし給ふもにくゝて入給ふ
をもきくゝねたるやうにて物し給ふむつび夕ト雲井そめたる
年月の程をかぞふるに哀にことほりにおほ
え給けり大将すこしねいり給へる夢に彼衛門督 「(11才)
此笛をとりて夢中の歌

ふえ竹にふきよる風のことならは

すゑのよなかきねにつたへなん

思ふかたことに侍りきといふをとほんと思ふ程に

わか君のねをびれてなき給ふ御声にさめ給ぬ

若君ちをあましなとし給へはめのとおきさはぎ

うへは御254となふらちかくよせていだきゐて乳を

くゝめなくさめうちまきしちらしなとし給ふ大将うへノ詞

の今めかしき御月めでに夜をふかしかうしもあけ

られたれはれいの物のけ入きたるなりとわかく

おかしきかほしてかこち256給へは大将打わらひてまろ 「(11ウ)

かうしあけずは道なくて物のけえいりこさ夕霧ましな

との給ふ此笛に柏木心をとゝめて夢にもみえけ

253 かほるの方へつたへん物をと也

254 思ふかたことにはかほるへ笛をつたへたきとの心也

255 散米也

256 かこち うらみ也

るかさらは仏の道におもむけんなどおほすへ大將^タ
 六条院に參給へは匂宮²⁵⁷みつばかりにて大將にい
 だかれ女御^{明石の}へおはしたればこなたにも二の宮の
 あそびみ給てまろも大將にいだかれんとの給ふ
 を三の宮あが大將をやとてひかへ給へり大將は
 かほるをまだよくも見ぬかなとおほすにかほる
 さし出給へれば花の枝のかれておちたるを見せ
 奉りてまねき給へははしり^{かほる}おはしたり」(12才)
 (挿絵)「(12ウ)

鈴虫〔源五十才 夕霧卅才 以詞并歌〕

夏頃²⁵⁸はちすの花のさかりに入道の姫宮御持仏
 くやうせさせ給ふおとゝの御心^ミさしにて錦の
 はた紫の上いそきせさせ給ふうしろのかたに
 法花のまだらかけてしろかねの花かめあみた²⁵⁹
 仏²⁶⁰けうじのぼさちをのくびやくだんしてつ

257 春宮〔母明石中宮〕

式部卿宮〔同〕

匂兵部卿〔同〕

かほるの御母〔女三〕

258 六条院の池の蓮也

259 曼陀羅

260 脇士ノ菩薩 観音 勢至

くり奉るあみた経はかねのけかけておとゝかゝせ給²⁶¹
 へりぢくへうしはこのさまなといへばさらなり
 講師まうのほり院もあなたに出給ふとて宮^{女三}の
 おはします西のひさしさしのぞき給へれば所
 せくあつげなるにさうぞきたる女房五六人計」(13才)
 つどひたり北のひさしにわらはべさまよふ火²⁶³ともあまた
 してけふたきまてくゆりみちたりわか君²⁶⁴らう
 がはしからんだきかくし奉れなどの給ふ源
 はちすはをおなしうてなと契りをきて²⁶⁵

露のわかるゝけふそかなしき

御あふきにかきつけ給へり女三

へたてなくはちすのやとをちきりても²⁶⁶

君かこゝろやすましとすらん²⁶⁷

れいのみこたちもあまた參給へりこれは忍ひての
 御ねんずだうなれど内^{女三}にも山のみかともきこし^{女三}
 めして御使ともあり」(13ウ)

秋の頃^{女三}西のわたとのゝまへを野につくらせあか
 のたなゝとのかたにしなさせ給ふ御めのとふる

261 金ノ計

262 参上

263 行香 焼香也

264 旁〔クルシ カラシ〕

265 けふいよゝへたてとならんと也

266 君はいまた世にしみ給へは蓮にもすまじと也

人とも我もく御でしにしたひ聞えけれどお
と、きこしめして心ならぬ人すこしもまじりぬ

れはかたへの人くるしうあはくしき聞え出つる

わざなりといさめ給て十よ人かたちことにてさ

ふらふ此野に虫ともはなたせ給てす、しき夕

暮に源わたり給て虫のねを聞給ふやうにて猶

思ひはなれぬさまを聞えなやまし給へは八月十

五夜の月の夕暮に宮は仏の前にねんずし給ふ

わかき尼君たち二三花奉るあかづきのをと」(14才)

水のけはひなと聞ゆす、虫のなきければ女三

おほかたの秋をはうしとしりにしを

ふりすてかたきす、むしのこゑ

〔源〕心もて草のやとりをいとへとも

なをす、むしのこゑそふりせぬ

きんの御ことめして引給ふ宮は御ずひきおこた

りて御琴に心いれ給てかきならし給へり螢

兵部卿大將の君殿上人もやかて参給ふ月はいつ

とても物哀なるにこよひのあらたなる月の色には

267 淡々シ

268 関伽土器

269 されと面白キと也

270 鈴虫を女三に比せり

271 三五夜中新月色 二千里外故人心

いつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひのめつらしきかな

わか世の外までこそ思ひながさるれなどの給ふ」(14ウ)

〔挿絵〕」(15才)

御かはらけふたわたりはかりまいる程に冷泉院の

御つかひあり 御

雲のうへをかけはなれたるすみかにも

ものわすれせぬ秋のよの月

〔源御返〕月影はおなし雲井に見えながら

わかやとからの秋そかはれる

しつかなりつる御あそひまぎれて人く皆院へ

参給ふいたうおとろきまちよろこひおほして

あけかたにふみなどかうじて人々まかて給ふ院は

秋好中宮へわたり給て御物語聞え給ふ御は、

御休所の彼御名のりなと聞給ふにもおこなひの御」(15ウ)

心す、みにたるを人のゆるし聞え給ふましき事

なれはくどくの事をたて、おほしいとなみ心ふ

かう世中をおほしとれるさまに成まさり給ふ」(16才)

夕霧 〔源五十才 以歌〕

夕霧の大將は一条の宮の御事を人めには昔を

272 おりゐのみかとなれば也

273 源は昔にかはりたると卑下也

274 心にほかの月をもみてしかな我宿からのあはれなるかと

わすれぬようにみせてねんころにとふらひ
聞え給ふ御休所物のけにわつらひて小野に²⁷⁵

山里もたまへるにわたり給ふ御車御せん²⁷⁶なども」(17才)

大将殿より奉れ給へり夕の北のかた「雲井の雁」この御け²⁷⁷

しきとり給へはとみにえわたり給はす八月十日は²⁷⁸

かりの程りつしにかたらふへき事ありつゝめでな²⁷⁹

から御休所のわつらひ給ふとふらひをも物せんと北

のかたに聞えて出給ふ女二²⁸⁰のいとこ少将の君なとさ

ふらふ人々に物かたりし給て年ころかう参り

なれけるを物²⁸¹どをうもてなさせ給へるうらめしと

の給へは人々もさ思ひて宮²⁸²にかくと聞ゆ大将

山さとのあはれをそふる夕霧に

たちいてんそらもなき心ちして

「女二」山かつのまかきをこめてたつ霧も」(17ウ)

こゝろそらなる人はとゝめす²⁸⁰

な²⁸¹かぞらなるわざかな家路もみえす霧の籬は

立とまるへうもあらずやらはせ給ふ又かゝる²⁸¹

275 小野は横川の麓たか野と云所歟 惟高のみこの住給ひし所也 又大原と云説

276 御前は御供也

277 夕霧の女二の宮へ心かけ給ふを北の方推量し給へは也

278 とみに頼也

279 横川の律師に用あると也

280 夕霧の有ましき心のあるを空なるといへり常のにはかはれり

281 やらはせ 追出す也

おりありなやと思ひめくらしいか、はせんと思ひ
わたさる右近の大夫の将監をめて此りしにいふ²⁸²

へき事ありこよひ此わたりにとまりてものせん

隨身などのおのこともはくるす野の庄ちかからんに²⁸³

まくさなとかはせてこゝには人あまた声なせ²⁸³

そとの給ふれいはあさればみたるけしきも見え

給はぬをうたてもあるかなと女二はおほせど人の

かげにつきてまきれ入給ぬ宮はいとむくつけう」(18才)²⁸⁴

なりてゐざり出給ふを引とゝめいとのとやかに

もてしつめて思ふ事を聞えしらせ給ふよとゝも²⁸⁵

に物を思ひ給ふけにややせくにあへかなる心ちし²⁸⁴

てらうたげにやはらかなる心ちし給へり夜更²⁸⁴

ゆき鹿の音瀧のをとひとつにみたれてえん

なり宮²⁸⁵ あはれけにない給ふて「女二」

我のみやうき世をしれるためしにて²⁸⁵

ぬれそふ袖の名をくたすへき²⁸⁶

「夕」おほかたはわかぬれきぬをきせずとも²⁸⁶

くちにし袖の名やはかくる、」(18ウ)

282 秣「マクサ」

283 あされされたる也 しとけなき也

284 あへかなる よはき心也 うつくしく ひはつ也

285 柏ト夕

286 一度我にあひ給ひし事は空ことにて有とも世上にはさはいはしと也

〔挿絵〕 一 (19才)

大殿などの聞思給はん事よ院のいかにきこしめし

おぼされんみやす所のしり給はさらんもわびし

ければあかさで出給へとやらひ給ふ出給ふ心空也

おきはらや軒はの露にそほちつ、

八重たつ霧をわけそゆくへき

〔女二〕わけゆかん草はの露をかことにて

なをぬれきぬをかけんとやおもふ

道の露けさも所せし三条殿へおはせは女君

のかゝるぬれをとがめ給ぬへければ六条院東の

おとゝにまうて給ぬ夏冬ときよらにしをき

給へれはかうのからひつよりとうで、ぬぎかへ給ふ」 (19ウ)

かしこに御文奉り給へれど女二は御覧しもいれす

御休所の事もありがほにおほしみたれんにとて

さしをき給ふを人々心もとなくてひろげたり

〔夕〕 〔へ〕玉しゐをつれなき袖にとゝめをきて

わか心からまとはるゝかな

御かちのりし此大將はいつより参りかよひ給ふそよ

心へたての霧をいかはかりわけんそと也

かこつけにてぬれきぬをかけんとやと也ぬれきぬはほす物なるをきせんとはめつ

らしきととかめ給へり

取出て也

〔へ〕あかさりし袖の中にや入にけんわかたましゐのなき心ちする

べも御車をかへしてけきなん出給ひつると法師

ばらいふ也いとやくなしほんさいつよくものし

給へは女二のえをし給はじもはらうけひかずとか

しらふりていふ御休所あやしくおほし少將の君を

めしていかでをのれにきなんとはきかせ給はざりしと」 (20才)

の給へはありしやうくはしく聞ゆいと口おしうおほ

すに涙ほろゝとこほれぬ少將女二へ参てしかなん

聞えさせ給ふと聞ゆれはわたり給はんとおほせど

なやましくあしのけのほりぬとて又ふし給ぬ猶

わたらせ給へとあれはぬりごめの戸あけあはせて

わたり給へり御休所はいかなりしなるともとひ給はす御

だいこなたにてまいらせ給ふ夕霧より又御文

あり御休所いでその御文返事聞え給へそこに

心きよくおほすともしかもちゐる人はすくなくこそ

あらめ心うつくしきやうに聞えかよひ給てなを

ありしまゝならんこそよからめとて見給ふ夕の歌」 (20ウ)

せくからにあさゝそ見えん山川の

なかれての名をつゝみはてすは

女二のなやましきをとふらひにわたり給へるおり

無益

本妻

其足下底

いつかたへそ心のゆくかたあらんさてはあさゝそ見えんと也

にて御返事（女二）ぞ、のかし聞ゆれどはれくしからぬ
さまになとかき給ひて 御休所

をみなへししほる、野（女二）へをいつくとて

一夜はかりのやとをかりけん（無曲ト也）

大将（夕）は三条殿にかへり給ふ北方（金井）はかゝる御ありき

を心やましけれどしらぬやうにて君たちもて

あそひまきはし給へりよひする程に御返（小野よりの）（リ）

もて参る女君（金井）とく見つけ給てうしろよりとり」（21才）

給つこはいかにし給ふそ六条（花ちる里の事）の東院の上の御文也

けき風おこりてなやみ給ふをいかにと聞えたり

つる也との給へと返し給はす引かくし給ふ明はて

てこ、かしこ見給へどなし女君（金井）は君たちのひい

なつくりすへてあそひ給ひ手ならひなとさまく

あはた、しきにとりし文の事も思出給はす大

将は御文のさまもえたしかにみずなりしかは思ひ

わつらひてよ（詞）べの文は何事かありしけふもとふらめ

に聞ゆへし我もなやましければ文をこそ奉らめ

とのたまへどとかくいひまきはし給ふ程に暮

にけりおましのおくのすこしあがりたる所をひき」（21ウ）

あげ給へはさしはさみ給へる也うれしくて御返（夕）に

295 しほる、は女二の体也

296 偽をつくりて仰らる、也

秋の野の草のしけみを分（女）しかと
かりねのまくらむすひやはせし（女）（298）

かしこには御返したにみえすけふの暮はてぬるをい

かなる御心にかはともてはなれてあさましう心もく

だけで御心ち又いたうなやみ給ふ女二はた、お

ほえぬ人（夕）に打とけたりしありさまを見えし事

口おしくおほす御休所は此宮（女）のいはけてつよき

御心をきてのなきを思ひみたれ今しは（自）しの命

もと、めまほしうな（御休所）た、人たに女は人ふたりと

みるためしは心うきをまもりてかゝる御身にはおほろ（301）」（22才）

けにて人のちかつき聞ゆへきにもあらすなとさ

まぐにの給ひなきまどひ給ふ事ことはり也かく

さはぐ程に大将殿より御文まいる御休所ほの

かに聞給て今夜（心中）もおはすまじきなめりと心う

く何にさることのはを残しけんとさまくおほ

し出るにやかてたえ入給ぬ物のけのれののごと

くとりいれたるとかぢ参りさはげといまはの

さまはしるかりけり宮（女二）はをくれじとおほし入て

つとそひふし給へり六条院（龍）ちじの大殿御とふら

297 分入しかとも無実事と也

298 （翻刻者註Ⅱ「し」に清点あり）

299 おほえぬ人 不定なる人也

300 忠臣不（レ）事（二）二君（一） 貞女不更（二）二夫（一）

301 おほろけ 大かた

ひあり山のみかとより御文あり宮めもみえ給は
ねど御返し聞え給ふ大将わたり給ておいの大和」(22ウ)
のかみなくくかしこまり聞ゆ少将の君彼おも
ほしなけし有さまをかたはし聞えてかこち

ける女二はたいめんなくてかへり給ぬ残りの事共
大和守した、め大将殿のみさうの人々めしおほせ
てつかうまつる宮は明くる、もおほしわかつて九月
に成ぬ大将殿より日々とふらひ給てかきつく
し給へどとりても御覽せす大将の北方はこ
女二の宮との御中をいかなるにかとおほしわけがた
くてはかなきかみのはしに雲井の雁

あはれをもいかにしりてかなくさめん
あるや恋しきなきやかなしき」(23才)
「夕」いつれとかわきてなかもんきえかへる

露も草葉のうへを見ぬ世を
九月十日あまりに又小野へわたり給て少将をめし
て後今はのきはの御文のさまもの給ひ出てな
き給へは少将も御休所のはて給し御ありさま
なとかたる鹿のいたうなきければ夕霧
里とをみをの、しのはらわけてきて

302 有や恋しきは女二

303 無は御休所

304 つるには何もと、まらぬ物をと也

われもしかこそおしまね
「少将」藤ころも露けき秋の山人は
鹿のなくねにねをそそへつる

宮に御せうそこ聞え給へどたいめし給はて帰給ふ」(23ウ)
(挿絵)「(24才)

道すから一条の宮を見給へは人がけもなく月
のみすみたるに

見し人のかけすみはてぬ池水に
ひとりやともる秋の夜の月

三条の殿にかへり給て夕と雲井そむきく
なげきあかして朝霧のはれまもまたす小

野へ文かき給ふ北のかたは心づきなしとおほせど
ありしやうにもばひ給はす

いつとかはおとろかすへきあけぬよの
夢さめてとかいひし一こと

女二のてならひにかきつけ給へるを少将が文に」(24ウ)
まきこめて返し奉る

朝ゆふになくねをたつるをの山は
たえぬなみたやとなしの滝

女二は世をのかれかくて小野にすみはてんとおほす
を院きこしめしてこ、にかく世を捨たるに女三

305 柏ノ事也

306 夢の世也 一ことは前に女二の夕へノせうそこを也

も身をやつし又かうあるはすゑなきやうに人

の思ひいはんもうたてあるへし世のうきにつけ

ていとふは人わるきわさ也今すこし思しづめ

給へと聞え給ふ大和守めして一条の宮草しげう

女どちのすみなし給へりしをみがきたるやうにし

つらひなしかべしろ屏風几帳まで奉らせ給ふ」(25才)

わたらせ給ふ日は夕霧おはしゐて小野へ御車

奉れ給ふ宮はさらにわたらじとの給ひ左五少将

御ぞとも奉りかゆれど我にもあらぬ御有さま也御

くしは六尺はかりにてすこしほそりたれはいみしの

おとろへや人に見ゆへきさまにもあらすとおほして

〈へ〉のほりにしみねのけふりにたちましり

おもはぬかたになひかすもかな

その頃は御はさみなとやうの物はとりかくしたり人々

いそきたちてくしのはこ手箱からひつふくろや

う物まで皆さきだて、はこびたれはひとりと

まり給ふへうもあらでなく御車にのり給ふ」(25ウ)

御はかしに経はこそへたるに女二

恋しさのなくさめかたきかたみにて

なみたにくもる玉のはこかな

307 (翻刻者註Ⅱ「左近」の誤刻か)

308 〈へ〉すまのあまの塩やく煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり此心を引かへたり

一条院の東のたいの南おもてを夕霧の御かたに

しつらひてすみつきがほにおはす夕霧わたり給て

少将の君をせめ給へはけふあすを過して聞えさせ

給へなき人のやうにふさせ給ぬるををしたちてひ

たふるなる御心なつかはせ給ふそと手をする今は

せかれ給ふへきならねは少将を引たて、をしは

かりに入給ふ宮は心うくてぬりごめにおまししかせ

内よりさしておほとのごもりにけりつらしと思ひ」(26才)

あかして夕霧

310 うらみわひむねあきかたき冬の夜に

又さしまさるせきの岩かと

なくく出て六条院におはしけり東の上女二の

事をとひ給へは故御休所の見ゆづる人のなけれはう

しろみにと侍しかはもとより心ざしも侍し事にて

かく思ひ給へ成ぬるを彼人尼に成なんと思ひむ

すば、れ給ふ彼ゆいごんたがへじと思ひてかくあ

つかひ侍る也院にも事のつゐてにかやうに聞え

させ給へと忍ひやかにの給ふ日たけて三条殿に

わたり給へり女君めも見あはせ給はす御そ引やり」(26ウ)

給へはつねに鬼との給へは成はてんとてとの給ふ

309 一向(ヒタフル)

310 小野にてもつれなかりしに又さしまさる也

此鬼こそ今はをそろしくもあらず神くしき

けをそへばやとたはふれ給へど何事そおいらかに

死給ひねまろもしなん見ればにくしきげ

あいぎやうなし見すて、しなばうしろめたしとの

給ふにおかしきさまのみまされはわらひてなにくれ

となくさめ給ふ雲井雁

なる、身をうらむるよりは松しまの

あまのころもにたちやかへまし

〔夕〕松しまのあまのぬれ衣なれぬとて

ぬきかへつてふ名をたゝめやは」(27才)

へ宮は又その夜もたいめし給はすぬりごめの北の口

よりいれ奉りてけりおとこは哀にもおかしうも

聞えつくし給へど女はあさましうつらく心づきな

しとのみおぼいたりあながちにも聞え給はす歎

きあかし給つ三条の君はいかさまにして此なめ

げさを見じとおぼして大殿へわたり給ひ女御の

御里におはするにたいめしれいのやうにもかへり給

はねは夕霧おどろかれ三条殿におはしたれは

311 おいらか 真実也

312 愛敬

313 夕をうらみんよりも尼にならんと也

314 タヲよからすとおほしめすとも又別人に思ひかへ給は、其名のたつ事よからすと也

315 無礼〔ナメゲ〕

君達うれへなき給ふを心くるしとおほすせう

そこたひく聞え給へど御かへりたになしおとゞの

見聞給はん所もあればみつから参給へりこゝにも」(27ウ)

若君たちおはしける今さらにわかしの御まじ

らひやかしの君たちもこひ聞ゆめりし姫君を

いざ給へおなし所にて見奉らんと聞え給ふおと、

聞給て蔵人の少将を御使にて女二宮へ奉給ふ

契りあれや君を心にとゝめをきて

あはれとおもひうらめしときく

〔女二〕何ゆへか世に数ならぬ身ひとつを

うしとおもひつらしときく

此少将も女二へ心をかけたり藤内侍の介かゝる事を

きくに我を雲井のゆるさぬ物にの給ふなる

にかくあなづりにくき事出きにけるをと思」(28才)

て雲井へ文を奉れり藤内侍

数ならは身にしられまし世のうさを

人のためにもぬらす袖かな

〔雲井返〕人の世のうきをあはれと見しかとも

316 柏ノ為あはれ

317 タノ為うらめし

318 何ゆへとも不知と也

319 我は数ならぬゆへ女二へ夕の御出を何とも思はぬと也

320 人の上のうきをはあはれと思へとも内侍心中のことく身にかへてまては思はすと也

身にかへんとはおもはさりしを

御法〔源五十二才春より秋まで 以歌〕

紫の上いたうわつらひ給ひし後そこはかとなく
なやみわたり給ふ事久しく成ぬいかてほある
さまに成ておこなひをまきれなくとおほし」(28ウ)
のたまへど源のゆるし給はす年ころわたくしの
御願にてかゝせ奉りける法花経千部二条院に
てくやうし給ふ花ちる里明石なともわたり給へり
やよひ十日なれば花さかり也紫の上

おしからぬ此身なからもかきりとて
たき、つきなんことのかなしさ

〔明石〕へへたき、こるおもひはけふをはしめにて

此世にねかふのりそはるけき

むらさきの上より花ちる里へ

たえぬへきみのりなからそたのまる、

世々にとむすふ中のちきりを」(29才)

(挿絵)「(29ウ)

321 採^① 菓^② 汲^③ 水^④ 拾^⑤ 薪^⑥ 設^⑦ 食^⑧ 于^⑨ 時^⑩ 奉^⑪ 事^⑫ 経^⑬ 於^⑭ 千^⑮ 歳^⑯
行基菩薩ノ歌へへ法花経をわかえし事はたき、こりなつみ水くみつかへてそえ
し方便品如^⑰ 薪^⑱ 尽^⑲ 火^⑳ 滅^㉑

322 明石の歌 祝ノ心に取なせり

323 紫上花ちるとは心のへたてなかりし也

〔花ちる〕むすひをく契りはたえし大かたの
のこりすくなきみのりなりとも

夏に成てはれいのあつさにいと、きえ入給ひぬ
へきおり／＼おほかり名だいめんを聞給ふにも其
人かの人なとみ、と、めらる中宮は久しき御対
面のとだえをめつらしく御物語こまやかにて
匂宮を前にすへ奉りて人のきかぬまにまろ
が侍らさらんにおほし出なんやと聞え給へはいと
恋しかりなんまろは内^{今上}のうへよりも宮^{中宮}よりも母
をこそまさりて思ひ聞ゆれ母のおはせすは心
ちむつかしかりなるとて目をすりてまきはし」(30才)

給ふさまおかしければほ、ゑみながら涙はおちぬ
おとなに成給ひてはこゝに住給て紅梅と桜とは

花のおり／＼もてあそび給へ仏にも奉給へと

聞え給へは打うなづきて御かほをまもり給ふ

秋に成てせんざい見給ふとてけうそく^{へ息}によりぬ

給へるに院わたり給へはむらさきの上

をくと見るほとそはかなきともすれば

風にみたる、萩のうはつゆ

〔源〕や、もせはきえをあらそふ露の世に

をくれさきたつほとへすもかな

324 をくヲ起居によせて也

325 紫にをくれすなく成度と也

〔中宮〕秋風にしはしとまらぬ露の世を」(30ウ)

たれか草はのうへとのみ見ん

いとくるしなめげに侍りやとて御几帳引よせて
ふし給へは宮は御手をとらへてなく見奉給ふ
にきえゆく露の心ちなれは御物のけとうた

かひ給て夜ひとよさまの事をつくさせ給へど
かひもなく明はつる程にきえはて給ぬ殿のうち

あるかぎりさらに物おほえたるなし院はましてお
ほししづめんかたなし大将よびよせ給て年頃

のほるなればとて御いみにこもるへき憎めしてさ
るへき事共大将おこなひ給ふまだかはらぬけし

きなかからかぎりのさまはしるかりけるとて御袖」(31オ)
をかほにをしあて給ふ大将も涙にくれてめも

見え給はす其日おさめ奉るかきりありける事
なれはけふりにのほり給ひぬるもあへなくそらを

あゆむ心ちして人にかゝりておはしける物の心
しらぬげすさへなかなぬはなかりけりかなるかなしさの

まきれに昔よりの御ほるもとげまほしくおほせ
とそしりをおぼせば此程をすぐさんとし給ふに

むねせきあつるそたへかたかりける大将は人めには
さしも見えじとつゝみてあみた仏とずひき給て

326 無礼

いにしへの秋の夕の恋しきに

いまはと見えしあけくれの夢」(31ウ)

源はふしてもおきても涙のひるよなくきりふた
がりて明し暮し給ふちじのおとゝより蔵人少将して

いにしへの秋さへ今のこゝちして
ぬれにし袖に露そをきそふ

〔源〕露けさはむかしいまとおもほえず
大かた秋の世こそつられ

冷泉院の後の宮より〔秋好也〕
かれはつる野辺をうしとやなき人の

秋にこゝろをとゝめさりけん
〔源〕のほりにし雲井なからもかへり見よ

わか秋はてぬつねならぬ世に」(32オ)
明石の中宮なともわするゝ時のまなくこひ聞え給ふ

幻 〔源五十二才 以歌為名〕

春のひかりを見給ふにつけてもくれまどひたる
やうにて人々参給へど御心ちなやましとてみ

327 野分の時見し事也
328 いにしへの秋は葵の上の事也
329 紫上秋果給はんとて秋に心をとゝめ給はぬかと也
330 後の御位の事歟

すの内におおはします蜚兵部卿宮わたり
給へはせうそこ聞え給ふ

我³³¹やとは花もてはやす人もなし

なに、か春のたつねきつらん

〔宮〕香をとめてきつるかひなく大かたの」(32ウ)

花のたよりといひやなすへき

思ひ人たちのかた／＼へもわたり給はす源

思³³³ひ人たちのかた／＼へもわたり給はす源

おもひのほかにも猶そほとふる

中納言の君上のめのと中将の君などはお前近くて

御物語聞ゆ三の宮は母のたまひしとてたい

のまへのこうばいとわきうしろみありき

給ふをあはれと見奉り給ふ源

うへてみし花のあるしもなきやとに

しらすかほにてきゐるうくひす」(33才)

(挿絵) 「(33ウ)

山³³ふき心ちよげにさきみたれ外の花はひ

とへちりて八重さく花桜さかり過かばざくらは

ひらけ藤はをくれ時をわすれす匂ひみちたるに

若³³宮まろが桜は咲にけり木のめくりに帳を

331 兵部卿を春にして

332 源ヲなくさめんとてこそと也

333 へへうき世には行かくれなんかきくもりふるは心の外にもあるかな

たて、かたひらをあげずは風もえ吹よらじと
かしこの給ふかほいとつくし源

今はとてあらしやはてんなき人の

心と、めし春のかきねを

入道の宮へわたり給ふ若³³宮もいたかれておはし

ましこなたの若³³君とはしりあそひて花お

しみ給ふ心ばへいといはけなし宮は仏の前に」(34才)

経をそよみ給けるやかて明石の御かたにわたり給

てのとやかに昔物語なとし給ひ夜ふけてかへ

らせ給ふつとめて御文

なく／＼もかへりにしかなかりの世は

いつくもつゐのときよならぬに

〔明石上〕雁³³⁵かゐしなはしろ水のたえしより

うつりし花のかけをたに見す

夏の御かたより御衣かへのさうそく奉るとて

なつ衣たちかへてけるけふはかり

ふるきおもひもす、みやはせぬ

〔源返〕はころものうすきにかはるけふよりは」(34ウ)

うつせみの世そいと、かなしき

まつりの日はみやしろのさまおほしやる中³³将の君³³

東おもてにうた、ねしたるを見給へはさゞや

334 雁也

335 源ヲ雁に比して紫ヲ苗代水

かにおかしけ也あふひをかたはらにをきたり
けるをとりて此名こそ忘れにけれとの給へは中将

さもこそは³³⁶〈へ〉よるへの水にみくさるめ

けふのかさしよ名さへわする、

〔源〕おほかたはおもひすて、し世なれとも

あふひはなをやつみをかすへき」(35才)

(挿絵)「(35ウ)

五月雨はいと、なかめくらし給ふ大将参給ふに

ほと、きすなきければ源

なき人をしのふるよるのむら雨に

ぬれてやきつる山ほと、きす

〔大将〕郭公君につてなんふるさとの

花たちはなはいまそさかりと

日くらしのなきければ源

つれ／＼とわかなきくらす夏の日を

かことかましきむしの声かな³³⁷

〈へ〉³³⁸螢おほうとひかふを見給て

夜るをしる螢を見ても悲しきは」(36才)

³³⁶ よるへはたより也 神仏によせても可然歟 清輔朝臣 住吉社ノ歌合ニ〈へ〉月影は
さえにけらしな神垣やよるへの水につらゝゐるまでよるへの水 賀茂に限ルト又余
ノ社にもありと 社頭にある水也

³³⁷ 〈へ〉夕殿螢飛思悄然 秋灯挑尽 未³³⁸能³³⁹眠
³³⁸ 螢ハ夜昼ヲ知ル 源ハ思ヒニ無分別ト也

時³⁴⁰そともなきおもひなりけり

七³⁴¹月七日 源

七夕のあふせは雲のよそにみて

わかれの庭に露そをきそふ

はての御法事³³⁹のいとなみに八月³⁴⁰ついたち頃は

まきはしけ也 中将の君

君こふる涙はきはもなきものを

けふをはなにのはてといふらん

〔源〕人こふる我身もすゑになりゆけと

のこりおほかるなみたなりけり

九³⁴¹月九日 源」(36ウ)

もろ共におきゐしきくの朝露も

ひとりたもとにかゝる秋かな

雁³⁴⁰なきわたりければ

大そらをかよふまほろし夢にたに

見えこぬ玉のゆくゑたつねよ

五³⁴¹せちなといひていまめかしけなるに〔十一月中の卯日〕

宮人はとよのあかりにいそくけふ

日かけもしらてくらしつるかな

ほるとげ給はんとおほすに年の暮ゆくも心

³³⁹ 一周忌

³⁴⁰ 術者ヲ幻ト云也 雁ヲ幻ニシテ術士ならば紫ノ行衛ヲ尋ヨ也 方士
³⁴¹ 豊明ハ節会ノ惣名

はそく人々の御文とものかたはなるへきを少し
残し給へるをやらせ給ひなとするに彼すまの」(37才)

ころほひ所くより奉りける中にむらさきの
御手なるをいまのやうにおほして

しての山こえにし人をしたふとて

あ³⁴²とを見つゝもなをまとふかな

かきつめてみるもかひなしもしほ草

おなし雲井のけふりとをなれ

御仏名³⁴³もことしは³⁴⁴かりとおほせは錫杖の声

くあはれにおほさる源

春までの命もしらす雪のうちに

いろつく梅をけふかさしてん

〔導師御返〕千世の春見るへき花といのりをきて」(37ウ)

わか身そ雪とともにふりぬる

〔源〕物思ふとすくる月日もしらぬまに

年もわか世もけふやつきぬる



勾宮 「かほる十四才より十九才廿才 まほろしと此巻の間九年也 以詞」

源かくれ給にし後彼御かげにたちつゝき給ふへき

342 跡ハ筆也

343 十二月十九日

344 錫杖経

人そこらの御すゑく有かたかりけり勾宮薫

ふた所なんきよらなる御名とり給へり三³⁴⁵のみやは
紫の上はくゝみ給しゆへ二条院におはします

元服し給て兵部卿と聞ゆ一の宮は春宮也二宮は

夕霧の中姫君をえ奉り給へり大姫君は春」(38才)

宮に參給ふ也源かくれ給て御かたくつゝるにおは

すへきすみかともにつるひ給ふ花ちる里は東³⁴⁶の院

にわたり給けり入道³⁴⁷の宮は三条の宮におはします

六条院うしとらの町に一条の女二³⁴⁸の宮をわたり

夕霧は三条殿と夜毎に十五日つゝかよひすみ

給ふ「女二ハ柏木ノ後家也 三条殿ハ雲井ノ雁也」かほるは十四にて二月に侍從³⁴⁹

になり其秋右近中将にならせ給ふうへにも秋

好中宮にもさふらふ女はうのなにかたちよきは

みなかほるへわたさせ給て院の内すみよくとの

み御あつかひぐさにおほされけり彼柏木の事お

さな心ちにほのきゝ給し事のおりくおほつかなく」(38ウ)

おほしてかほる

345 第廿六 雲隠 有名無実 名をもつて心をあらはす也 此名題にて六条院ひかるかく
れ給ふ心しらるゝ也

万葉集に人の逝去するを皆雲かくれといへり

弓削皇子薨時

「大君はかみにしませはあま雲のいをえかしたにかくれ給ひぬ

大伴皇子被死時

「も、つての岩ねの池になく鴨をけふのみ見てや雲かくれなん

おほつかなたれにとはましいかにして
はしめもはてもしらぬ我身そ

夕霧のおと、わが御子たちよりも此かほるをはこ
まやかにもてかしづき給ふかほるのかほかたちは
そこはかとすぐれたるきよらと見ゆる所もなけ

れどた、なまめかしう心のおくありてかのかうばし³⁴⁶

さそ此世のほひならすあたりとをきをひ風³⁴⁷

もまことに百ふのほかもかほりぬへき心ちし³⁴⁸

ける兵部卿の宮いどましくおぼして春はむめ^{（あらそふ心也）}

秋はをみなへし萩菊ふちはかまわれもかうなと「（39才）

わざとめきてこのましようし給ふれば世の人匂

兵部卿かほる中將と聞にく、いひつゝくかほる十

九に成給ふ年三位の宰相にて中將もは

なれ給はす夕霧の六の君内侍ばらなるを一条

の宮のさるあつかひぐさあらねはむかへとり給ふ^{（金）}

わさとはなくて此句かほるに見せそめなはかな

らす心と、め給ひてんとたよりをつくりなしのり³⁴⁹

346 媚（ナマメク コヒタリ）

347 三十二相ハ卅二ノ毛ノ穴ヨリ香出也

348 百歩

349 春弓ヲ見る事礼記よりおこれり

正月賭弓果テ勝かたの大將里第にして還饗おこなへり
此時夕霧ハ左大將

清和天皇貞観二年正月十八日始之

ゆみのかへりあるじのまうけ六条院にてし給へは
みこたちおはします³⁵⁰「（39ウ）

（挿絵）「（40才）

紅梅 「かほる廿才 以詞名也」

ひけくろのおほきおと、の御むすめまきはしらの

君は故蛭兵部卿の宮にあはせ姫君一人まう^{（蛭）}

け給へりしを宮うせ給て後故ちしのおと、の

二郎君あぜちの大納言北のかたうせ給て後³⁵¹

此まきはしらの君へ忍ひくかよひおとこ君一

人まうけ給へりもとの北方の御腹に姫君二人

おはします蛭兵部卿の姫君もへたてわかず

おとなび給ぬれば御もなときせ七けんのしんでん

つくりて南に大納言殿のおほい君西に中の君

東に宮の御かたとすませ給へり此君達は聞え「（40ウ）

給ふ人おほく内春宮より御けしきあれど内には

明石の中宮おはします春宮には夕霧の女御さ

350 此物語皆左勝畢（翻刻者註）卷末註）

351 此大納言 紅梅の右大臣 声のよき人也 此卷は宇治ノ橋姫稚本総角同時也 仍

竹川ノ巻ト并ノ一二定かたし 薫中將竹川には始四位侍従 中央に宰相 終に中納
言 此卷には始より源中納言トアリ 然れば竹川の次ト見ゆるに又竹川の末に按察
大納言右大臣になる此卷には按察大納言トいへり 所詮此卷は竹川の中央ト見え
り

ふらひ給へはきしろひにくれどさのみいひてや

は人にまさらんとおぼしたちてあね君春宮へ

奉り給ふ十七八の程にてうつくしけ也中の君は宮

の君によろつの事をならひあそびわざをも師

のやうに思ひ聞てそおはしける紅梅大納言宮

の君に琴をとあればくるしとおほしなからす

こしかきならし給ふ若^{〔大納言ノ子〕}君内へ参らんとて参り

給へるに笛をふかせ軒ちかき紅梅おもしろ

く匂ひたるを一枝おりて匂宮の内におはしま^{〔41才〕}

すに持て参れと聞ゆ源氏の君かくれ給ての

かたみには匂宮を^{〔352〕}仏の名残にあながひかりは

なちけんを二たひ出給へるかとうたがふことし^{〔353〕}紅大

心ありて風のにははすその、梅に

まつ^{〔353〕}へくひすのとはすやあるへき

とくれなゐの紙にかきて此若君のふところ

がみにをした、みていだしたて給ふ匂宮見つ

け給てこよひはとのみなめりこなたにとめして

けちかくふさせ給へり若君うれしと思ひ聞ゆ

此花^{〔匂宮〕}のあるしはなと春宮にはうつろひ給はさりし

との給へは^{〔354〕}心しらん人になと父のいへると申すつと^{〔子詞〕}「(41ウ)

352 大論云 尺迦仏入涅槃之後阿難登^{〔高座〕}結^{〔集諸經〕}之時其形如^{〔仏仍〕}衆会疑^{〔仏再出給〕}

353 へへ梅か香を風のたよりにたくへてそ驚さそふしるへにはやる

354 へへ君ならて誰にかみせん梅花色をも香をもしる人ぞしる

めてまかづるに御返し匂宮

花^{〔355〕}のかにさそはれぬへき身なりせは

風のたよりをすくさましやは^{〔匂宮〕}

中の君よりも宮の君のかたちをやんことなくお

もひしみ給へは忍ひやかにと返く^{〔宮〕}の給ふ此若君

も東^{〔宮〕}のをはむつまじう思ひてあはせ奉らはや

と思ふ紅大此御返しを見てけふも又若君して

もとつかの^{〔356〕}にほへる君が袖ふれは^{〔357〕}

花もえならぬ名をやちらさん

〔匂〕花のかをにほはす宿にとめゆかは^{〔358〕}

いろにめつとや人のとかめん^{〔359〕}「(42才)

(挿絵) 「(42ウ)

北^{〔まき柱〕}の方内わたりの事のついでに若君の一夜との

ゐして出たりし匂ひのおかしかりしかは兵部卿宮^{〔匂宮〕}

より御せうそこや有しと、ひ給へは梅^{〔若君〕}の花めで

給ふ君なれはとて紅大おりて奉らるうつり香

ならんといふかほるはたきにほはさでも人香こそ世

にあやしけれなとかたらひ給へり紅梅の大納言は

中の君をあはせんと心かけ給へるを北のかた宮の

355 大かたの花の香にかるくしくうつらぬ心と也

356 本ッ香

357 中君を参らせんの心也

君をいとおしと見なから匂宮のいたう色めきか
 よひ給ふ所おほく八（宇治）の宮の姫君にもしげうま
 うで給ふたのもしげなきあだくしきなともつゝま
 しければ宮の君の御返りなどのなきをもことはり
 にさかしらかり聞え給ふ匂はまけじの御心そひ
 ておもほしやむへくもあらず

竹川
 「うたひ物の名以歌并詞也」

玉かつらの内侍のかみの御はらにおとこ三人女二人
 おはしけるひげくろうせ給にしかは夢のやうにて
 御みやつかへもおこたりぬ姫君たちのみやつかへの事
 おとゝのそうしをき給ければ内よりおほせ事絶す
 あれど明石の中宮のならばなくおはしませはをさ
 れ給はんも心つくしなるへきをおもほしたゆたふ冷
 泉院よりねんころにまめだち聞え給ひければ「（42ウ）
玉の詞いかゝは有へきよの末にや御覧しなをされまし
 などとためかね給ふかたちよくおはするきこえ
 ありて心かけ申給ふ人おほかり夕霧の蔵人の
（母雲井雁）少将もねんころに申さるいつかたにつけてもゝて
 はなれ給はす玉かつらより御母雲井の雁へ御文
 奉り給へど此中の君をぬすみもとつへくむく
 つけきまで少将は思へり冷泉院にかほる侍従
 を御子（ミコ）のやうにおほしかしつくその頃十四五はかり

にてめやすく人にまさりたるおいさき見え給ふを
 かん（王）の君はむこにても見まほしくおほしたり此殿は
 三条の宮と近き程なれはおりく君達（ミコ）にひか「（43才）
 れてかほるおはして見え給ふ御かたち此四位（かほる）の
 侍従ににる人そなかりけるわかき人々心ことにめ
 であへりかん（王）の君もなつかしう物聞えなとすむ月
 のついたち頃紅梅の大納言ひげくろの子藤中（ミコ）
 将夕霧の御子六人引つれておはしたり蔵人（タノミ）
 の少将は思ふ事ありがほなるに夕のおとゝは御几
 帳へたてゝ玉と御物語聞え給ふついでに姫君
 の事を冷泉院よりの給はするはかくしき
 うしろみなき人のましらひをと思ふ給へわつら
 ふと申給へは女御（359夕詞）はゆるし聞え給ふやとのたまふ
 女御（王ノ詞）もつれくなくさめまほしきをなとすゝめ「（43ウ）
 給ふにつけて思ひ給へよるとなん聞え給ふみな
 帰給ひてかほる侍従かんの君へ参給へりわかき人
 くは姫君の御かたはらにはこれ（かほる）をこそならべて
 見めと聞にくゝいふかんの君は御ねんずだうにお
 はしてこなたにとの給へはみすの前に（かほる）給へり
 宰相の君と聞ゆる上らうのよみかけ給ふ

360 おりて見はいとゝにほひもまさるやと

359 女御は姫君の叔母也

360 かほるを近ク見は猶まさらん也

すこしいろめけ梅のはつ花^{〔心あれ也〕}

〔かほる〕よそにては^{〔心〕}もき木なりとやさたむらん^{〔心〕}

したにほへるむめのはつはな^{〔心〕}」(44才)

(挿絵) 「(44ウ)

廿日あまりの頃梅の花さかりなるに源侍^{〔心〕}藤^{〔心〕}

侍^{〔心〕}従のもとへおはしたり中門入給ふに同しなをしすかた

なる人たてり蔵人^{〔心〕}少将也引つれて紅梅の木の本に

梅かえうたふ内より女はう達あづまをしあ

げてかきあはせたりはかなし事なといひて和琴

をさし出たりかたみにゆづりて手ふれぬにある

じの侍従してかんの君こよひは猶^{〔心〕}鶯にもさそ

はれ給へかしとの給へはかほる心にもいらすかき

わたし給ふ少将^{〔心〕}さきくさうたふ藤侍^{〔心〕}従竹川

うたふ少将は源侍従にみな人心よせ給ふらめと

くつして少将^{〔心〕}」(45才)

人はみな花に心をうつすらん^{〔心〕}

ひとりそまとふ春のよのやみ

内の女はう衆返し

361 摘木 枝葉なくもきあけたる木也

〔心〕枯はて、もき木に成し昔より焼捨られん日をそかそふる

〔心〕我といへはあたこの山にしをりするもき木の枝のなさけなの世や

362 鶯声 誘引来^{〔心〕}花下^{〔心〕}

363 さきくさ 此殿うたひ物也

364 かほるに心うつすらんと也

おりからやあはれもしらん梅のはな^{〔心〕}

た、かはかりにうつりしもせじ

あしたに源侍従より藤侍従のもとに

竹川^{〔心〕}のはしうちいてし一ふしに

ふかきこゝろのそこはしりきや

〔あるしの侍従〕竹かはに夜^{〔心〕}をふかさしといそきしも

いかなるふしをおもひをかまし^{〔心〕}

やよひに成てさく桜あれはちりかひくもりさかり」(45ウ)

なる頃あね君桜のほそなが山ふきなとかさね「十八九の程也」

中の君はうす紅梅に御ぐし色にて柳の糸のやう

にたをくともみゆ碁うち給ふとてむかひ給へるいと

見所あり侍従^{〔心〕}けんぞし給ふとてちかうさふらひ給ふ

あに君たちものぞき給へり左近中^{〔心〕}将「廿七八才」右大弁

かんの君かくおとなしき人のおやに成給へど猶さかり

の御かたちとみえ給へは冷泉院昔恋しうおほして

何に付てかはと姫君の御事をあながちに聞え給ふ

にそ有けるあに君たち立給て後うちさし給へる

基桜をかけ物にて暮し給ふ蔵人^{〔心〕}少将侍従の御^{〔心〕}

365 折からにこそ心をまとはすらめさのみこ、程へは少将心うつさしと也

366 竹川うたひしをはしと也

367 夜をふかさしよへの御帰ヲ

368 いかなるふしにかと、まり給はんと卑下也

369 見助 助言也

さうしにきてらうの戸よりのそく君たちは花の」(46才)³⁷⁰

あらそひをし給ふに風あら、かにふけは姫君

さくらゆへ風にこゝろのさはくかな

おもひくまなき花とみるく³⁷¹

御かたの宰相の君

さくと見てかつはちりぬる花なれは³⁷²

まくるをふかきうらみともせず

〔中の君〕風にちる事はよのつねえたなから

うつろふ花をたゝにしも見じ³⁷³

此御方の大ゆふの君

へへ心ありて池のみきはにおつるはな³⁷⁴

あはとなりても我かたによれ」(46ウ)

かちかたのわらはへおりて花の下にてひろひても

てまいれり右

大そらの風にちれともさくら花

をのかものとそかきつめて見る³⁷⁵

左のなれき

曹^{虫掛}□

おもひくまは思ふかひなき也³⁷¹

世を觀したる歌也³⁷²

うつろふ花はこなたへよる心也³⁷³

へへ枝よりもあたに散にし花なれはおちても水のあはとこそなれ³⁷⁴

馴公〔名也〕³⁷⁵

へへさくら花にほひあまたにちらさしと³⁷⁶

おほふはかりの袖はありきや³⁷⁷

院より御せうそ日々により女御のおほし

へだつるかとおほしのたまへはいそきおほした

ちねと女御からもせうそこあり〔此女御はひめ君のおば也〕」(47才)

(挿絵) 」（47ウ）

此事を藏人少将きゝてしぬはかり思ひて

母の雲井の雁をせめ奉れは雲井より玉かつら

へ御文をまいらせらる玉も心くるしくて院より

わりなくのたまへはおほししづめよとの返事也

姫君の御参り過して中の君をとおほすなる^{（いもつし）}

へし少将はあね君に心うつりければ侍従のさ

うしにきたるに源侍従の文を見ぬ給へりばひ

とりてみれば かほるの歌

つれなくてすくる月日をかそへつゝ、

ものうらめしきくれの春かな

侍従は此返しせんとてうへに参り給へは少将腹」(48才)

たちてなかだちの中將のをもとにあひて碁の

時の事をかたりて

いてやなそ数ならぬ身にかなはぬは

へへ大そらにおほふ計の袖もかな春さく花を風にまかせし³⁷⁶

袖はいつくにかあらんと也³⁷⁷

人にまけし378のこゝろなりけり
中将うちわらひて

わりなしやつよき379によらんかちまけを
こゝろひとつにいかゝまかする

〔少将〕あはれとて手をゆるせかしいきしにを

君にまかする我身とならば

又の日は卯月に成にけり少将

花をみて春はくらしつけふよりや380「(48ウ)
しけき381なけきのしたにまとはん

中将かんの君に聞ゆれはいとをしと聞給て

〔玉〕けふ381そしるそらをな382かむるけしきにて

花にこゝろをうつしけりとも

九日にそ院へ参り給ふ少将は今をかぎりの

命なと中将へいひやる此文姫君にみせ奉れは

あはれてふつねならぬ世の382「383ことも

いかなる人にかくるものそは

〔少将返〕いける世のしにはこゝろにまかせねは

きかてやゝまん君か383「384こと

378 人にまけしと思へとも身になはす冷へ御参りあると也

379 助言にはよらすつよきゆへと也

380 冷へ参給は、歎キト也

381 空おほれしてけふそしると也

382 一こともこなたにはしらぬと也

383 姫君の一言を不聞して死やせんと思ひしに不慮也とよろこふ心也

姫君まつ女御の御かたにわたり給て夜更て「(49才)
なんうへにまうのほり給ける源侍従も

心かけにしかは藤侍従とつれてありくに彼

御かたのおまへの五葉に藤のさきかゝりたる

を見やりて

手にかくる物にしあらはふちのはな

松384よりまさる色を見ましや

〔藤侍〕むらさきの色はかよへと藤のはな

こゝろにえこそまかせさりけれ385「(49ウ)

(挿絵)「(50才)

内386にはひけくろの子中将をめして此姫君の院

へ参り給ふを父のをきてたがひたるとの給ふこの

姫君七月よりはらみ給へり其年かへりておとこ386

たうかありかほる侍従は右のかとう也386藏人少将は

楽人の数の内にあり十四日の月くもりなきに

御前より出て冷院に参る内の御前より此院

をはづかしうよういくはふる中にも少将はにほひ

なく見くるしきわた花かざして竹川うたひて

みはしのもとによるほと姫君の見給ふらんかしと

おもひやりてひが事もしつへくなみたぐみけり

384 かほるの身を松に比して也 色もなき心也

385 我まゝならぬゆかりと也

386 正月十四日

事はて、源侍従院よりめして御休所^{玉のむすめ}の御かたに「(50ウ) わたらせ給ふかほる御供也少将の有さま聞え給て内より

竹かはのそのよの事はおもひいつや

しのふはかりのふしはなけれど

〔かほる〕³⁸⁸なかれてのたのみむなしき竹川に

よはうきものとおもひしりにき

御休所さうのこと侍従ひわ院わこんひかせ給て此殿

などあそひ給ふ卯月に姫宮生れ給ぬ中の君には

母君内侍督ゆづり給へりあね君引ちがへ給へるを

なま心ゆかぬやうなれどこれもらうくしくもて^{今上}

なし給ふ母かんの君は内には時く忍ひて参給ふ

おりもあり院^巻にはわつらはしき御心ばへの猶たえ「(51オ)

ねはさらに参給はす年ころありて又おとこみこ

生れ給へりをろかならざる御すくせなと世人おど

ろくみかとはましてかぎりなくめつらしとおほさる

されと弘徽殿そねみ給へは人くも心やすからす

くるしき事にいひあへれば母かんの君くやしとおほす

彼蔵人少将は三位中将とかいひて左大臣の御むすめ

をえたれど思ひそめし心たらす夕霧は左大臣

紅梅の大納言左大将かけて右大臣に成給ふかほる

中将中納言三位君は宰相也かほるは此よろこひに

かんの君に参給へり宰相の中将はだいきやうの又の日³⁸⁹
こゝに参給ふ廿七八にてかたち花やか也〔右兵衛督ハ右大弁侍従は頭中将
也〕「(51ウ)

387 正月に玉かつらにて梅かえうたひし其夜の事は也
388 なからへての心也

389 大饗 あるしまうけ也